

明治四十四年九月十五日發行（毎月一冊）三十三號

求道

第 第
四 八
號 卷



求道第八卷第四號目次

求道

◎人生と信仰、信仰と人生

講話

◎教行信證『信卷』

近角常観

〔夏期求道會講話〕

告白

◎求道生活より信仰生活へ

下井香潤

◎信仰書簡二章

一
二

柏原あき子

寺田榮之亟

雜錄

◎徹底せざる信仰

近角常観

時報

◎夏期求道會概況及『教行信證』御眞本拜見

◎求道會館建設の相談會及其發表

毎日曜午前九時

求道學舎

〔本郷區森川町一番地〕

毎土曜午後二時

第二求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三求道會

〔日本橋堀坂町脱教所〕

求道

第八卷
第四號

人生と信仰

信仰と人生

嘗て人生と信仰と題して、人生諸種の問題が、最後に信仰に入りて圓滿に解決せらるゝことを辯じたることがあつた。今や信仰と人生と題して、絶対の信仰より人生諸種の活動が、健全に且つ秩序的に實現することを辯せねばならぬ。彼『人生と信仰』を辯じたるときは、時恰も戦後にして、一般が煩悶懊惱を極め、青年は悲觀厭世の思想を抱き、文學に、思潮に、渾沌として未解決の時であつた。而して上下共に其解決を求めつゝあつたのである。そこで此等の諸種の思想が、信仰に入りて最後の歸結を得ることを叫びたのであつた。然るに現今の大勢を見るに、或意味に於て一步を進め、寧ろ不完全なる解決を爲し、絶対ならざる信念に立ちて、不健全なる人生、不秩序なる社會を實現せんと試みる様になつたのである。

る。換言せば嘗て人生諸種の問題が信仰に入りて解決せらるゝものとして、少くとも思想上の根柢より解決せんと試みられたものが、其思想が未徹底なるが爲め、不健全なる人生を實現せんとし、又其信仰が眞に絶対に達せざるが爲に、秩序ある人生の實生活を實現することが出来ぬ憾がある。併此兩者は固より一體の問題にして、前者は人生より信仰に入るの問題にして、後者は信仰より人生に出づるの問題である。若し人生より進みて信仰の奥底に達したるときは、必ず人生に活躍せざるべからざる次第である。人水に沈みて其底に達するものは、必ず浮び来る如くである。而るに沈みて浮び来らざる所以のものは、足其底に達せずして、水中に溺れつゝあるからである。人信仰に入りて絶対の奥底に達せざる時は、必ず信仰に溺れ、思想に沈みて、人生に軽々と浮き来る事が出来ぬのである。言ひ換ゆれば信仰にして人生に活躍することの出来ぬのは、其信仰が達すべき所に達せぬからである。

道元禪師が心身脱落と云はれたるときに、天童如淨禪師が脱落心身と附加へられたといふことである、心身脱落、脱落心身、實に言ふべからざる味がある。今亦、人生信仰、信仰人生と

言はんと欲するのである。眞宗に於ても行信の關係亦之に外ならずである。曰く、念佛信心、信心念佛である。實に無限の意味がある。眞俗二諦の關係亦之に外ならずである。人生の問題結局眞諦の一によりて解決せらるゝものゆへに、其眞諦の信仰の一により、俗諦人生の諸問題皆解け來るのである。しかるに報謝の念佛、俗諦の經營が信仰の一より流れ出づることなくして、眞諦信仰の上に附加へられたるが如く、別々になる所以のものは、眞諦の信仰夫自身が絶対の信仰でなきゆへに、信仰夫自身より人生俗諦に流れ出づることが出來ぬのである。言ひ換ゆれば眞諦信仰にして、報謝經營の上に活動せざる所以のものは、抑々信仰其物が人生全面の力となりて居らぬからである。人生凡てのものがすたりて居らぬからである。選擇集に所謂あらゆる自力諸行を捨閉閑抛されて居らぬからである。

抑々選擇集と教行信證との關係、言ひ換ゆれば法然聖人と親鸞聖人との關係、亦此に外ならずである。選擇集で言へば、あらゆる諸行をすて、念佛の一に歸するのである。發菩提心、持戒持律、孝養父母、造塔起像、皆一々擇びすて、念佛の唯一を選びとられたが選擇本願である。選擇集の書き

る、觀音勢至の引導を蒙るのである、大聖權化の善巧方便を得るのである、南無阿彌陀佛々々々々々々。

信仰は我安宅也、世路は我本務也と考へて、一面に佛陀は我を救ひたまふと信じつゝ、一面其職務に忠實、一點の浮泛なく勉めつゝあつた人があつた。而して如何にしても其職務が勤まらぬに泣きた、我力の足らざるを悲みた。是れ畢竟眞實の信仰を得たるつもりなれども、信仰其物が徹底して居らぬからである。言葉だけでは佛陀が救ひたまふと云へど、佛陀の大悲の下に、我身の罪惡が自覺されて居らぬからである。恰も手に救濟の繩を握りながら、足は必墮無間と落ちて居らぬからである。淨土は樂しむと聞きて、參らせて下さると自らさめ込んで、安心は出來た、信心は頂けたと思ふて居る人が多い。樂しい淨土を前に置いて欣求するのが信心ではない、如來の大悲にたすけられて往生を遂ぐると大悲が頂けたのが信心である。不思議が信ぜられたが信心である。兎角信心の前に、厭離欣求の思想がなければならぬ様に考ふるものが多い。聖人は厭離眞實を先にするは聖道門自力、欣求真實を先にするは淨土門中の自力であると斷じて、利他眞實の信心は唯虛假不實の我身あるのみ、之に對して慈悲矜哀の本願

様から、淨土の三部經及淨土の祖師、特に善導一師を以て書かれてある。而して御行狀も南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本、日々稱名七萬遍是である。しかるに親鸞聖人に至りては、彌陀にたすけられまゐらすべしと信ずるほかに別の仔細なきなりである。唯念佛しても、口にあらはれたときは既に報謝である。一代藏經も、亦淨土眞實の教行信證を顯はしたるの外はない。信心即ち淨土の大菩提心である、本願即ち第一義乘である。無戒名字の比丘にして、清淨眞實の家庭を實現し、父母孝養の爲にとて念佛一遍にても申したることなき信心なればこそ、其信心の上よりは朝家の御爲め國民の爲め念佛すべし、世の中安穩なれば佛法弘まれとの御報恩の爲め念佛が出てくるのである。雜行雜修を捨てねばならぬ。現世祈禱をしてはならぬと制せねばならぬ様なことでは、信仰が未だ徹底して居らぬのである。捨てよと言はずとも、一心專念のものが、一分たりとも自分で善が出來ると考へられるものか、罪業深重と頭が下りたるものが、善を雜へられるものか、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界と自覺したるものが、現世の幸福を祈るべき。されど一たび大悲の光明に攝取せられたるものは、冥々の間に諸佛菩薩諸天善神の護持養育を得るのであ

力の眞實が一つあるのみである。此御慈悲を蒙りて、初めて欣求心、厭離心が自から涌き來るのである。夫故に大信心を欣淨厭穢の妙術と名づくるのである。既に信心の上に於て罪惡が自覺されてなきものゆへ、世路に於て如何に眞面目にしても物足らぬといふは、畢竟人間として出來得べからざる點までも、實行せんと試みて、而も其實行難を泣くのである。其志や賞みすべし。其情や哀むべしと雖、要するに不可能のことをなさんとしつゝあつたのである。煩惱具足を忘れて居るのである。必墮無間を自覺して居らぬからである。落ちぬものは救の繩は不用である。飢えぬものが満腹したといふのは、物喰はずして喰ふた氣になりて居るのである。信仰は安宅也と叫べど、不安ならざる人生に、唯言だけの安宅である。煩惱具足火宅無常の世界なれば、唯一の救濟として佛陀が安宅である。かくてこそ其唯一の繩、唯一の安宅が實に杖とも力とも信ずるほかはない。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候である。何んとなれば、もと／＼必墮無間であるからである。かく御話しなした時に彼眞面目なる人が一たび大悲の眞の救をいたゞきたるのであつた。

是畢竟するに從來信仰を得たりと思ひしも、徹底せざりしが爲に、眞の人生が活動せなかつたのである。しかし、其信仰の未徹底なるに心付かずして、徒らに唯俗諦が守れぬ、能力が足らぬと泣きつゝあつたのである。是古來信者の上に多くある間違である。畢竟是眞諦と俗諦と、其範圍を区分して、未來問題を眞諦門として、恰も罪惡を寛容されたるが如く心得、現世問題を俗諦門として、嚴格に信者の名の下に無限の實行を強むんと試る弊がある。如何に未來と現在とを區別するも、眞面目に考ふれば、現在の行爲が即未來の原因たることは、誰も自覺せねばならぬ。夫故其様に兩刀使の様な便宜的の信仰に安住することは出来ぬ。猶一層皮肉に言ふならば、如何なる罪惡でも煩惱でも、眞諦門の入口を無事に通過せしめて、俗諦門の出口に於て、嚴格に一々誰何して、通過せしめぬ様なものである。苦まざらんと欲するも苦しまずには居られぬのである。信者たるもの亦憐むべきものである。

豈嘗に古の信者のみならんや、現代の青年にして既に信仰を得たりと自認し、少くとも根柢ある思想に透達したりと考へつゝ、其思想信念が人生行路の上に活躍せざるが爲に、泣きつゝあるもの少くない。甚しきに至りては、遂に外界と

講話

教行信證「信卷」

(夏季求道會講話)

此度は親鸞聖人の教行信證の信卷を述べたいと思ひます。それに先だち、まづ報恩講式文を拜讀しようと思ひます。御承知の方も多いでせうが、親鸞聖人の御傳の大體を覺如上人が其徳を讃嘆しつゝ書かれたのが此報恩講式文であります。いつも、聖人の御命日に讀むことになつて居りますが、今年はこのに聖人の六百五十回忌にあたり、此年に於て計らずも、かゝるさゝやかながら、難有い會のひらかれたことゆゑ、萬事不規則ながら、そのつもりで、先づ報恩講式文を拜讀しようと思ひます。

(式文拜讀)

偕此教行信證と申すは、云ふまでもなく、親鸞聖人の信仰の眞髓をお書きになつてある書であつて、聖人が稻田に於て、五十二歳の時此書を御撰述になりました。此書は昔から非常にやかましく申して、容易に讀むべからざる書とせられ、これを讀むことに付きて、餘程注意を致しました。それ故これを今讀まして貰ふことも、かゝる六ヶ敷意味では逆も出来ませんが、聖人が常にあなたの御喜びになつた御信心及び御喜び

衝突し、一世を敵視し、徒に怨嗟の情を抑へ、聲を吞みて哭するものもあらう。此等の人は須らく回顧一番、先づ其信仰夫自身を考へねばならぬ。思想夫自身を檢せねばならぬ。絶對の信仰は必ず人生全面に向て光を與へねばならぬ。あらゆる境遇、あらゆる職業、あらゆる機類に向て其慈悲の光が透徹するのである。如來は我等の凡てを御存知なるのである。我等の罪惡を底まで見透しなるのである。我等の苦惱を悲憫したまふのである。而して我等が爲に泣き、我等が爲に思惟し、我等が爲に修行したまふのである。我等の不眞實不清淨を觀そなはして見捨てたまはぬ、大慈大悲の親心こそ我等が爲の生命、我等が爲の力、我等が爲の光明にたまはります。是實に無碍光如來の光明なり。南無阿彌陀佛の名義なり。阿彌陀如來の御心なり。我等は此御心に叶ひ、此光明に攝取せられ、此御名を聞きて、此に初めて聞其名號信心歡喜の人にしていたゞくのみ。是偏に御親のやるせなき御誓の御力である。

若不生死のちかひゆへ
 信樂まことにときいたり
 一念慶喜するひとは
 往生かならずさだまりぬ。
 南無阿彌陀佛

になつた御文を私も數年毎日喜ばしていたゞき、拜讀さしていたゞき、その喜びを毎日曜毎に御話しいたすに外ならぬのであります。さりながら、かく書物につき、際立て、御話することがありませんから、近頃さういふ話も聞きたいと思ふ希望も出てありますし、自分も本につきて、御話しようと思ふのであります。いはゞあまりに無遠慮な僭越なことではあります。聖人の御苦勞を喜ばして貰ふつもりであります。今申すとほり、平日の話の如く信の上より、話すこと故、六ヶ敷思はず、私も六ヶ敷くはなす意なしに、聖人の喜ばれる佛の御慈悲のまゝを話さして頂くつもりであります。

處でこれより讀む文は『教行信證信卷』の特別の序文で、大切の文であります。これは淺草の坂東報恩寺の聖人の眞筆に、ことにこの處が實に著しき聖人の筆蹟を以て、書かれてあります。眞宗を御開きなされた聖人の何より肝心の要點、即ち信心について書かれた様子が筆先にあらはれて、その書き出しの御文は實に著しい筆であります。

顯淨土眞實信文類序
 夫以獲得信樂發起自來選擇願心開關眞心顯彰從大聖於哀善巧

此句は多年御聞きの方は私が口に筆に何百遍繰り返したかわからぬ御文であることは御承知でせうが、此二句が畢竟信卷の精神であつて、これを頂くと此外何も云ふことがないであります。

「夫以獲得信樂、發起自來選擇願心」それひそかに考へてみれば信樂即信心、樂は愛樂、ねがふ、如何にも信心の喜ばし

き思ひ、佛を慕ひ喜びねがひ憧れる心地がこれにあるのであり
 ます。殊に第十八願に至心信樂欲生我國と佛が仰せられて
 あります。されば疑なく大慈大悲の佛を信じ願ひ、その佛に安
 心さして貰ふことが信樂、此信樂開發して一念發得すれば、
 信仰の問題はそれで解決するので、人生問題も茲に初めて解
 るのであります。進んでいへば永劫の問題が解決して、佛の
 大悲が心に届き、佛を疑なく、心に難有く喜び、佛の下に參
 らして貰ふことに決定するのであります。

獲得は得るといふこと、『自然法爾章』には、

獲の字は因位のとさうるを獲といふ、得の字は果位のと
 さにいたりてうることを得といふなり。

とあります。此娑婆に信心を得て正定聚の位に入ることが
 獲、極樂に往きし有權が得、『正信偈』にも

必獲入大會衆數、得至蓮華藏世界

とあります。此娑婆で信心を得、極樂へ往てから法性の悟を
 開くのであります。此の如く我等行者の上につきて獲得の字
 を使ひ分けてあります。されど、『今自然法爾章』の御言葉で
 は、因位果上のことは私のこととなくして此信心獲得の出來
 るは、佛が因位の時、佛が果上の時、佛が阿彌陀如來、佛とな
 り給はざりし前が因位、佛となり給ひしが果上であります。か
 らる因位果上の恵みにより、吾等が往生するなりと八十八歳
 の御時お書きになつたのであります。

故にかく信樂を獲得することは、心に信心發起し歡喜する
 こと、これが如來選擇の願心より發起するのであります。信
 心とは吾々の信心を得やう、佛を喜び、善き心にならうと勵

みて起るのはありません。佛のたすけやうと云ふ親心より
 吾々の心に起るのであります。佛の遣る瀧なき誓願の御心あ
 る故、其御心が吾等の心に届きし時、信心開發するのである。
 他力の味は茲であります。他力だと云ふて、佛に此方から打
 任せて、投げやりにするのではない。他力とは本願力也と仰
 有つてあります。明かに大慈大悲の佛あり、その佛が迷へ
 る我等を哀れと思召し、遣る瀧なき御心より殆んど一分も餘
 祐なく哀れみ下さる、其やるせなき親心が吾々に貫徹したの
 が、他力であります。

こゝに際だて、申したいのは青年の方が信仰を求むる上に
 種々の豫想があります。しかし信仰とは吾々の心に悦ばしき
 思ひの起る一つの實驗であります。自分の心に佛があると
 思ひ修養するのではない。信樂を獲得するとは明かに直接佛に
 接し明らかに直接光明に觸れ明かに大悲を實驗し、云ふに云
 はれぬ信念が心にあらはれたのが信仰であります。それにな
 りたいとおもふても此方から待ち設けたる心の状態では何時
 までも得られませぬ。信樂獲得とは即ち實驗と云ふてよい、大
 悲のために未だ經驗なき喜が現はるゝのであります。結果に
 はかゝる信樂があらはれますけれども、その思ひの起るには
 其源があります。其味の味はへるのは其本の味があるから味
 はれるのである。此宇宙人生に明かに我等を憐れむ眞實の佛
 ましたし、遣る瀧なく思召す大悲の御心ありて、それが届き
 し一念に喜が起るのであつて、其御慈慈を頂く外に實驗も何
 もありません。頂かにならんと思つて居ては大悲が心にと
 さませぬ。此苦める迷へる我々の心があるために、如何にも

今日迄大悲の親様に苦勞を掛けました、此一念を頂かしたい
 とおぼしめす此佛心より外に他力といふことはありませぬ。

斯くいへば、それでは、さういふ佛があると思へば、夫が
 信心であるかと云ふに、そんな間接のものではない。確かに
 待ちかね給ふ佛の仰せは此惱める我々を一刻もやむ暇なく思
 召すのが、選擇本願であります。かゝる佛、親様のましますこ
 とを如何して私の心に知らして下さるか云ふに、なほ從來
 眞宗の説教を聞き、眞宗の云ふ所を御承知の方にははを立
 て、申したいのは、佛の本願といふことが耳馴れて居るから此
 大救済が殆んど、何んでもないやうに軽々しく思ふてこの謂
 れを聞いても深く戴かぬのであります。それ故私は本願を疎
 り聞き、信仰を著しく戴かぬことに就て茲に際立て、今更
 の如く御本願の御謂を申しませう。

それは第一御同様が何處より來りしか、又何處へ行くか、
 何も知らずに營々として日夜動いて居る。なほ考へてみれば
 皆自分／＼を中心として慾を起し、我慢を立て、生活を求め
 人に對しては隔て心を起し、或は争ひ、或は種々悪しき心を
 起して日暮をし、又は怒り、貪り、何の考も無く唯つまらぬ自
 分の考を目前に日常生活をして居ります。我々は煩悩深く、
 罪惡多くして、淺猿しいものとは一應思ひますけれども、人
 間には斯うゆうことがあるもの位に、遂あたり前のことと思
 ひ、そこでかゝる我々が大にしては一生の仕事、小にしては
 日々の起居動作に至るまで、やつてゆく。結局の問題は如何
 云ふことに依て方がつくかと思へば、五分五分に争ふて居る
 ので、假りに一寸譲り、世話もし、同情はしても、皆相對であ

つて、日々の日暮は一々皆無意義であります。平日はそれでも
 よけれど、遂に人生の大問題には蹉跎してしまふ。自己や世
 の中を考へてみれば皆五分五分のことをして、よしあしを云
 ひ、日暮をして見るのであります。私自身の最も苦しみまし
 たのは人に對して立派に出來、よき事が出來ると思ふたの
 が、最後にそれは偽りて、結局人は争ひ、隔て、一つのよき心
 なく、日夜共に苦しんで居るものであつて、殊に自分として
 如何しても安心の出來なかつたのは疑ふものに隔てんやうに
 し、敵によくして行くことさへ出來れば、人生はもう解決出
 來るけれども、それが出來ぬ。飽迄によくすると云ふことは
 出來ぬ。最後には皆五分五分の争をし世の中は諸の十惡、五
 逆をやつて居る。かゝる人間が如何して解決がつくかといへ
 ば、飽くまで、戒律を守り、座禪をやり、倫理、道徳で絶対
 によく出來れば、解決がつくのであるけれども、さて、それ
 が出來ないのである。そこで問題は斯う云ふのであります。
 此人生に我々は斯様に悩み、五分五分に考へて苦んで、又そ
 れをやめることの出來ぬ人間となつてみれば、かゝる私に對
 し、よくならねども、隔つれども、眞實ならねども、よく其
 心を知り援いて、それを駄目だと迷をけ、咎めることなく、
 又悪くても善いと投げ置くのでなく、投げて置くでは助けに
 ならぬ、悪くても善くても善いては、安心は出來ぬ、悪くても善
 いで安心が出來る位なら苦しまないものである。タツタ一つ、斯
 る淺間しき心のある吾々に其惡い心が可愛そうである、成
 程それは、よいことはないが、人間としては、その心はとれ
 ぬ、其とれぬ處が可哀想である、その問題の解決出來ぬものを

可哀想に思ふと、吾々苦しめるもの、心をよく知り、如此きものを却つて可哀想と思つて見棄てられぬ、いぢらしい、だから汝の親となり、同情者となり、隔て多き苦しみ多き汝のことは、充分解つて居る故心配するなと、眞の慈悲の同情から言葉斗りてなく、實際同情の涙を灑いて下さるのが佛でありませぬ。本當に此佛がなかりせば、此五分五分の人生に如何に傾み深い人でも、安心は出来ませぬ。それで問題はさういふ方が此世にあるか、なきか、唯これでありませぬ。

無けれども、有ると思ふのであるといふのは、實際無いのである。そこで御本願に、總ての人の結局迄行き、罪の深き、よく出来ぬ解決出来ぬものを、憫れと思召すのである。これが肝心であります。大抵は救と憫れと離れて居る。哀れだと云ふのは、つきとめて、して見やうなきもの、それが哀れだとの佛の心である。それが有るか無いかで此世の問題が解決するのである。他力とは此親様の本願である。十方衆生皆苦しみてあり、如何なる善人も悪人もあはれむといふことは出来ぬ、結局、善心はない、かゝるものを可哀想と云ふのが、親心對し五分五分でない、かゝるものを可哀想と云ふのが、親心であります。病氣で不具で、してみやうなき子をよいと云ふ親はなければ、斯様に人に見棄てられて居るものが、親としては、一層不憫である。かゝる人は如何かして助けたいとの遣る瀬なき心より、五分五分の爲に苦しんで居る人の心に、かゝる察しのある佛心を届けて、子供が之を知つて有り難いと頂くやう、こんな己のやうなものを哀れむ佛が在せしかとコロリと其迷をはなれ、苦がとれるやう、其者を助け、

助けんが爲に佛になる、若し佛心を届けずば、我は佛と名のるまじ、佛となつた以上は、病氣に惱み、日常生活に苦しみ悪業を犯し、立派な事をしておれば、してあるて衝き當りて苦しむ、一人一人の十方衆生に無限大悲の慈悲を知らして、此の迷を解き、佛心に出會はせ、佛の境界に導びき、佛の國に集め、未來の苦しめる者に安心させるやうに出来ねば己は佛とはなるまいと云ふ、御誓である。此誓は實に軽く思ふてはいかぬ。佛の此世に来る大本はこの心を衆生に届けねば、佛とならぬ、沈みに沈んで居る人間を悉く助けんがために我は佛となるのである。この心から五劫が間思惟し、永劫が間修行して遂にあらはれ給ひし佛である。十劫の昔より佛のまじ兼ね給ふことはわからぬが、種々の問題が解決出来ぬて苦しみて居たが、それを哀れと思ふ親が居るぞと、本願成就以來、我々に對して、向つて下さるのが親様の心である。

越中に非常によく念佛する人があります。以前、伊勢の村田師につきてきかれたのであります。爾來十年御念佛を申して其の感化で多くの信者が出来た。其の人のいはれるには、近頃大へん念佛がゆるんできた、如何と私に聞かれた。其様實に貴とく私も耻ぢ入る計りてあります。て私は一應私の考だけいひました。最後に私は何時も申す借金例を申しました。佛が借金を濟してやると仰有る。仰せは有難いが如何も借金がどう御座いますと遠慮する。それでは我の持つてある金の量を疑ふのか、いや決して金の量は疑ひませぬが、といつて悉皆打明やうとはしない。金の量も疑はないとすれば、それでは己の親切を疑ふのか。御親切は誠に有難いが、

如何もこんなに借金を御渡し申すとは出来ませぬと、有難いことも、悪いことも知つて居り、難有い程悪さもわかつて居る、然しこんなとでは、まだ遠慮して居る。九呑みにする人が、斯るものをと、九呑みにして本當に解つておらぬ様に。其人にも云へぬ借金し悪い事を佛が知らぬと思ふか、其爲に汝が惱んで居るから、可哀想だと言ふのでないか、汝は其悪い心を打出せぬと思ふから後しざりするのだが、其借金があるから可哀想だと云ふのではないか、と佛は斯様に仰有る。するとまだかういふ人がある、其佛の心はありがたすぎて頂けぬと。然しこれは佛心を尊く頂いた様だが、器物の蓋が大きすぎて當て嵌まらぬと同様、謙遜して居るやうだが、自分がまだよくなれると豫想して居る故、佛の救が自分の惡に合はぬのである、其のして見やうのない者を、よく知召してそれを助けやうと云ふのが佛心である。この御佛のみ心ならずは、一分一厘よくなれぬ奴だから、可哀想と仰有るのが丁度當嵌まるのである。その借金を承知して、それを可哀想と思ふぞよ、とこれまで云へばよいのだけれども、猶疑つて見れば金は佛の金、佛の寶、佛の力、其御親切は疑はないけれど……、まだ私の借金は私の責任と遠慮をする。そこで佛の仰せられるには是は三井岩崎の様な金があるから與へよといふのではない。汝が斯る借金を持つて居るから可哀想と思ひ、その惱みを救ひたいために積んだ金である。丁度茲に金があるからと言ふのなら、遠慮もあらうが、その苦める者にやらう、やらねばならぬとの考から積んだ金だとの佛心を聞き奉りては如何して遠慮が出来やう。本願とは汝等貧しき者にやらうために我が

態々現れて積んだ金である。我れ無量劫に於て大施主となりて、普く諸の貧苦を濟はずんば誓ふ正覺を成らじ、我々貧乏な者を救ひたいためばかりに、現はれたまひしが阿彌陀佛である。此寶をやる、やらんといふ段ではない、汝にやらねばならんとて、つくりた寶ゆゑ、汝もしこれを受けないならば、我の今迄の苦勞は水の泡となる。南無阿彌陀佛の寶は水泡となる。悉く無益となる。茲にあるからやるのではない。汝にやらねばならぬ、救はねばならぬといふのが我誓、我念力である。我々が貰はねばならぬ様に御心を籠めさせられてある南無阿彌陀佛である。此やるせなき親心を我々は戴かねばならぬ。

夫以みれば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す

一分一厘でも此方から貰はにやならんと思ふてはならん、今此處に居られる林君が安心せられたも此處である。愈私が會津出立の時、如何かして南無阿彌陀佛を得にやならぬと苦しんで言はれた、私は其得にやならぬてはいかぬ。得られるやう、稱へられるやうにちやんと佛の方でして置いて下された御念佛であるときいて忽ち安心された。彼の越中の人も十年も稱名念佛して居たが、いよく私の出立の時、氣がついて本誓重願空しからず、あり餘つた寶を下さるのではない、わざわざ此私の爲に作つて下さつた、私に稱へさす爲に與へねばいかぬとの佛の御誓から御廻向下さつた御念佛を、今迄澤山さうにかるゝと稱へておりました、たゞ金があるから下さつた様に思つて居りました。が、此念佛が斯る私の爲にやらうと

てこしらへて下さつた、この心が解らぬかと、今日迄待ち給ひし本願の御心かと氣づきました、疎に思ふて居ました、借金に惱み、五分五分の心から到底放れぬ奴、これを大悲でつき破り、通常であからぬ鍵を開けて遣るとの思ひから、佛になつて下された、その廣大の御心が南無阿彌陀佛であるとは、十年來稱名しながら、今日初めてかゝる廣大の御心でありしかと非常に喜ばれました。得にやならぬと思ふて居る間は此方に力かいます。佛が在すのは私一人の爲であつたかと氣附いてみれば直ちに頂かすには居られませぬ。

選擇とはをらびにをらぶこと、選の字は佛が我等のためによきものを選び給ふのであります。丁寧にいふときりがありませぬ故委しきことはあとにして、擇とはをらびするところ、我等が佛になる道に戒律座禪、觀念、道徳等澤山ありますが、此等によりて、我等がたすがる位なら、佛が現はれ給はぬのであります。破戒、無戒、愚痴無智の者の爲に戒も捨て坐禪もをらびして、皆をらび捨て、最後の一つ何ををらび取るかと云ふに、斯る無智愚痴、無能の者が、何も出来ぬからそれを助けやうと云ふ佛の御心から、我々に出来ぬものは悉く擇びずて、出来ぬものを助ける親心もて、南無阿彌陀佛一つを知らせ、それ一つを選び取り、斯る放逸極まりなき者を助けんが爲に罪業深重のものを助けることが出来ぬは佛とならじとの佛心を封じ込めた。南無阿彌陀佛一つを與へられたのである。これ一つで救はんとの念佛なれば選擇本願念佛といふのであります。故に如來の願心は、かゝる極惡深重の者を助けぬば措かぬと誓はせられたのであります。此函

まだ外に薬がある様に思ふてゐる。自分はまだ到底見込のないすべの醫者が見放した病人であると悟つたときは、其瀕死の病人の爲に特につくりし薬でなければ到底助からぬ。此薬を此病人がいただくときは、此薬は毒ではないか、など、危ぶみ疑ふどころではない、よかれ、あしかれ、ありがたく飲まずには居られませぬ。無邊極濁惡の危篤の病人に對して下さつた如來選擇の願心もおなじである。これは最も肝心なのであります。此一週間は飽くまでこゝを申し上げたいと思ふのであります。

二

今日は昨日の續きを御話いたします。昨日は初日ゆゑ、大體をお話して置きましたが、昨日

夫獲得信樂、發起如來選擇願心の文はあらかた申述べた、去ながら猶一應繰り返し、昨日云ひ盡せぬ處を話させう。昨日充分云ひましたが今少し選擇願心のことを際立て、言ひたい。選擇願心とは法然聖人選擇集に示された肝心のことに、法然聖人が選擇集にて示された選擇本願は今日他力信仰を聞くものが日なれて居るが、實に法然聖人が選擇本願といふ一大福音を宣説したまひし爲に一面當時の佛法は根本的に破壊されたと云ふてよい。従つて法然聖人の示された他力の眞意は此選擇本願により、明らかになるのであります。故に聖人が一代の間一世に向ひ示されたる最も肝要の事は此選擇本願にあるのです。此扇は要で總て保たれてあります。他力本願の要は選擇本願方でありま

蓋相應が、まことにありがたいこととあります。此如來の御救ひでなくは此曲つた私の身は如何しても救はれぬ。如此まがつた函と蓋とがピチンとよく合ふ。如來の選擇心は此罪の人間に罪のものをめあての御救でなくは合ひませぬ。むつかしい錠前をあけるには普通の鍵では開かぬ。これに丁度適當した如此鍵がなければ開かぬ。我等惡業の凡夫は逆も戒律等では開けることは出来ぬ。曲がり曲がれる悪しき我等には、特別の南無阿彌陀佛の金剛の信心ばかりにて長く生死をへだてける。函蓋相應といふは此處である。

又親が着物を拵へて呉れる。之がよすぎるといふは親の心をよくいふたのではない、即ちそれが適せぬといふことである。その手織がよすぎるといへば、親は私の缺點をよく知つて居るのでないといふことになる。よすぎるのではない。私の汗がき、亂暴なる缺點はよく御存じて、そしてそれに應ずる丁度よい適當のものを作つて下さるのである。選擇願心も如此であります。私の心を見援きて、そこを救はんと言ふ佛の遣る瀧なき御心が如來選擇の願心であります。如此私の機に相應せる本願なれば、他の道で行けぬ私が假令人がそれは虚假だと云ふても、他の道をとりにて此道を捨てることが出来ませぬ。他の道で行けるなら疑ふことも出来やうが、此一つの御心を承つて見れば、私一人のためなりけり、たゞ南無阿彌陀佛と選擇願心の難有きことを喜ぶ許りてあります。

當り前て助からぬ病人の爲めに特に拵へあげた薬は危篤の病人が飲まねば助からぬ。それを自分は危篤と知らずして、す。されば、法然聖人を流罪に處すとも選擇の二字は捨てられぬ。假令源空を死罪に處すとも云々とあるも此外はないことをよく味は、ねばならぬ。意味は昨日云ひましたが選擇集讀まれた方は解りやすいかもしれませぬが、他力専門の言葉で云ふと口馴れてある故、今日の言葉でいへば、我等凡夫が佛の悟の境に往く肝心の問題、即ち相對有限の我々が絕對無限の佛の境に其間に如何なる連絡をもち、絕對の境に往かれるかと云ふことが、宗教の根本問題であります。處て其關係を明かに云ふと、絕對と相對と融和の境に行くと區別なきも、既に相對に我々がありて、絕對に行かんとするについては、如何しても其間、相對のもの、己を正しくして絕對に行く一つの方法よりありません。しかし行かんとする處は崖の上で崖の下より登りて上に行かねばなりません。處が其道が立派に往けると解決するのである。云ひ變へると釋尊の説かれた道で、六度萬行とか種々の自力の道は皆縦に佛の教を歩む道である。これが出来るか實際に如何。若し戒を持ち座禪をして達することが出来るか實際と、我人が此關係の問題に於て道はあれども往く事が出来ぬこととなる。そこで今一つの問題はそれならその道ありと雖も實行が出来ぬこととなる。親戀聖人は

一切の羂生海無始よりこのかた、乃至今日今時に至る迄穢惡汚染にして眞實の心なく、虚假諂偽にして眞實の心なし。といはれました。苟も人間、群生海、無始より今日今時、一歩も眞實心がありません。大なる石、小なる石、砂であらう

が、砂利であらうが石といへば下へ落ちるものであります。これ聖人が始めて云ふのではない、選擇願心より聖人の心にうつる結果からることあります。こゝでいふつもりではありませんでしたが丁度具合がよいから私の経験を申しませぬ。此人生問題、信仰問題、教理問題コテ／＼して居る間は信仰にゆかれませぬ。

私も、もとより敢て如説に修行することを企てはしませんでしたが、幼より宗教の教育を受けたる結果、是非とも善き心、理想的にしたいと色々考へて、なほ耻をいへば立派に宗教の爲に盡す、公のため正義の爲には生命を擲つてもよいと思ひて實行して居るが如く思ふて居ました。こんな考のある間は選擇本願や他力本願など意味は解らぬ、何も此様なことを云ひ出す必要もなければ、自力他力の二道何れをとらうかとよく人の云ふ所であるが、根本の間違である、自力で遣れる位なら自力で遣る、自力が出来んから他力でやるのである。物は二者同時にやるとは出来ない。處が今云ふ如く、私は遂に自力で出来ずして衝き當つてしまひました。最後に自分ばかり全力をそゝいて眞面目に遣つて居るも人は了解せぬ、世の中の人には眞面目に遣らぬ、人は勝手なものだ、世は強い者勝である。と人を悪し様に思ひ初めたのが抑も衝き當りの始めて、人を隔て、形の上では同情し、譲りもして居るが、心の上ではそゝなつて居ない。悪い心が止まない。名譽心を棄て、やるなごと思つたのは皆虚言であつた。人を憎む心が起りなごするは全く名譽心でやつて居つたからだ。是が信仰問題に衝き當りの始めて、もうかくなれば、如何によくせうとするも駄目

して其苦を悉く引受け、汝の相談相手になるから心配するなと、向ふより私の苦の起る點をよく理解して、私が隔て、憎めばそれだけ彌々同情して大慈悲心を以て、其悪いのが可哀相と同情してくれる人があるならば、タツタ一人、一滴の涙を注いで下されば、私は復活するのである。それさへあれば世にぞりて敵なるも、同情ある友の一滴の涙に如何な我慢の私も蘇ることが出来る。其友にあらば死すとも瞑するとか出来る。否其慈悲の恵の光にあらば我は其爲に死すともよい。生命を捧ぐるも構はぬ。人生此慈悲の塊なくば人間生きても所詮なしと思ふた。處に最後に至りて『懺悔録』にある如く、始めてそれは佛であつたと氣づかせてもらつたのである。一點であるが、向ふよりくる友と云ひ、同情の深い友と思ふたは實に佛の慈悲の事であつたと、始めて氣のついた時は今日迄かくとも知らず反對の方のみを眺めて居た、誠に濟まなかつたと懺悔する。君よい位の事では安心せぬ。人がお前は善いと云ふは今迄人を胡麻化した結果で、人がよいといふともそれで安心は出来ぬ。又人が悪くても善いと云ふとも、私は悪くても困る。佛が悪くてもよいと仰せられても、悪くつては私が困るといひたい。それなら汝は悪いといはれたら人がいよく、自分を捨たすと苦む。それでは如何いふのがいゝか。己の悪をスツカリ知りぬいたうへ、その己の悪を捨てず、如何に悪く淺間しきを見捨てず、それが哀れであると同情してくれ、其人のまことによりて始めて安んずる。佛の大慈悲の涙のものは私の悪がもどなのである。悪くつてもよいではない。そのやうなものは他に助かる術なき故、それに光を與へてやり

であります。斯やうのことは既に御経験になつた方に申しませるのでありますから、後戻りの様ではあります。斯ふいふことは切り詰めて何處何處までも、カツキリ極めて仕舞はねばいけません。活かすか殺すか何れかにせんければいかぬ。切り詰めた問題に懸りながら、他力であると云つてポイントとふくれてしまふてはいかぬ。苦しむドン底まで眞面目に飽まで考へねばならぬ。如何しても隔て心がやまない。此方が隔て心を止めさへすればよいのだとは思へども止まない。此處で如何するかとカツキリ問題が逼つて来る。一方からはやらねばならぬ、一方からは出来ぬ、往くも還るも仕方がない、こゝである。こゝいふ道は進むことが如何しても出来ぬ。が一つの道が開かれてある。然しこれは下から此方が眺めては駄目で、上から眺めて我等を見とめて下さる方がなければならぬのである。私の上よりいへば昔の信者によくある中位で、そゝいふものを助けるが佛とい、カゲンで胡麻化して仕舞ふからいかぬ。今でもそゝいふものを助ける佛だと中位で安心してしまふ人が澤山ある。出来ぬは出来ぬと自力をなげすてるのである。隔ての止まぬ苦しき我心を見て誰か如何にもさうであらう、我は了解して居る、汝の境遇にあればいかにも上へは登れない、それも尤もだ、苦しむ心を打あけよ、否打明けずとも皆な承知して居る、否それを引受けてやらう、心配するな、我は汝の如く善き心起らず疑のとれぬ、其の汝の心をよく理解せる故、成程汝は悪いけれども、其の悪い淺間しき心を了解し、汝の隔ての止まぬを悪しく思はず、最と思ふ、成程汝の境遇なれば其心起る、其苦しき心に同情

たい、其無明より救つてやりたいの慈悲の心を以て眺める友人の親様である。かね／＼聞く親は此廣大の御心も眺めて下され、此様な悪人を呆れたまはず哀れんで下された、實にありがたい御慈悲と氣附いて見れば、あゝ自分は淺間しきものであつた、今迄之を如何かしなければならぬと思つて居る中は解決出来なんだ、今日まで浮ばう浮ばう、隔て心を取らう等と思つて居たのは、抑も間違であつた、實に有難いと根本的に心が解けて仕舞ふ。隔てるけれど御慈悲があるからありがたいではない、その隔て心が溶けて仕舞つたのであります。

されば假定ではありませぬ。苦しい時思ひ出すといふ様なものではない。佛かねて我等の破戒無戒を思ひ召しての選擇であります。有らゆる相對界の道は駄目だと佛、昔にしるしめし、それ故總ての自力の道を捨て、たゞ本願南無阿彌陀佛一つで助けんとしたまふたのである。その意味は相對より絶對に向ふ道では駄目なものが、助けられる道はないかと五劫が間思惟して選擇なされ、愚痴無智の稱へ易き様、南無阿彌陀佛の一つにて助けるとの抑の本願を知らなければならぬ。

設ひ我佛と成らんに、十方の衆生、我名を稱へんに下十聲に至るまで若し生れずば正覺を取らじ。と云ひ給ひて、戒をよせとは仰せられぬ。かゝる人を助けやうとて、念佛の道をたて給ふたのである。法然聖人の『散善義』を讀まれた時「一心に専ら彌陀名號を念じて行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名づ

く、彼の佛の願に順するが故に」とあつた。一心に専らとは、他のものは何もいらぬ、他のものを並べぬ様に一心である、専ら南無阿彌陀佛を稱念するが彼佛願に順するのである。彼の佛の願とは稱我名號とあるばかり、此外ない。此念佛許りで助けんと云ふのが如來の本願である。我々は衝き當つて苦しんで居るけれども、そんな事は今更の問題ではない、佛豫てしるしめして、十方の衆生とよびかけたまひし時、既に戒律等を棄て、南無阿彌陀佛一つで助けやうとのたまふ其如來の御心が御本願である。願心である。其心の儘が南無阿彌陀佛一つとなつたのである。下の方へ向けて網を下して下さつたの故、直ちに其網を握ればよいのである。其如く唯佛の御心をありがたう御座いますと頂いたのが信心であります。

法然聖人は之を思ひきりかゝれました。處が母の尾の明恵上人はじめ、叡山の偉い僧侶方が法然聖人に反對して、そんな事いふものは佛法でない、自力でなければならぬと大いに攻撃をなされました。明恵上人などは身をささみても戒をなすも佛道を勵むの人である。法然聖人よりいへばいくら左様に勵んでも、出來ぬことをするのである。それ故駄目であるといはれる。しかしまた明恵上人からいへば、例ひ出來ぬとも左様するのが佛の遺戒である、もしくはせずば、佛教でない。抑も發菩提心は佛教の根本、これを捨てた法然聖人、親鸞聖人は悪いと云はれる。これは實に自力、他力の水際である。明恵上人は法然聖人のいふ事は佛教の破壊する源であるといはれた。法然聖人は、到底戒律の保てぬもの故、本願があるのではないか。例へ源空を死罪に處せらるゝとも念佛はやめら

れぬ。登れぬものを上より繩を下し、上げてやらうといふのが佛心である。其心のありたけが南無阿彌陀佛となりて現はれ給ふたのである。法然聖人の御弟子三百八十餘人もあつたが、皆眞實わかつた人は少なかつた。『選擇集』を讀みながら、皆わかつて居る。立派な藥だといふことは解つて居るが、自分はまだ戒律を保てぬほど悪くはないと思ふて居る。藥はよけれど我いふやうな具合だから、わからぬのである。

如來の仰せをさし、廣大な御慈悲とは思ひながら、自分はさほど悪くないと思ふて居る。それでも助かるのだと思ふて居るから、選擇の眞の意味がわからぬのである。親鸞聖人は藥の効能を眞に味はされた。他の藥では助からぬものを、助けやうといふ此藥を與へられたは、全く此親鸞一人のためだと味はれました。親鸞が其惡いものである。他の藥で助かる位なら、これを與へられぬ。他の藥で助からぬ、といふとを親鸞聖人はちやんと御承知になつてあつたのである。即ち、危篤の病人であつても、また、養生すればよくなると思ふもの故、南無阿彌陀佛の藥をのまないでも、助かるとおもふて居る。助からぬ、他の藥ではとても助からぬ、と思ふたればこそ、拵へた南無阿彌陀佛ではないか。『選擇集』は、自分は一分もよいことの出來ぬものと、充分宣告された親鸞聖人に依て、始めて眞の意味が現はれたのであります。申くらぬのことはいけません。悪いものだけれど助かるぐらゐてはあります。到底助からぬものなればこそたてられた本願ではないか。

藥の効能書は三百八十人がよまれた、だれにもわかることをそれらの人がわからぬは此處なるを氣附けねばならぬ。我危篤、到底助からぬ奴、此愚痴無智なる親鸞が、此念佛一つで助かると示された本願の綱こそは親鸞の生命である。そんなのかと中位の事してはいかぬ。悪いけれども御慈悲がありがたいはゆかぬ。故に親鸞聖人は『歎異鈔』にて

親鸞はたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せをかうよりて、信ずるほかに別の仔細なきなり、そのゆゑは、自餘の行をほげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはとこそすか

問されたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は、一定すみかぞかし。これが親鸞の身の上だと仰せられたのである。一つもよいこと出來ぬ我身の上、そのものに飲めと下さる、その時は藥を詮索する餘裕があるか何うか。効能があるか、ないかは此方で調べてわかるはずはない。如此どの藥もさかぬものに、のませて下さる爲の藥といたどくなり、あゝありがたいと頂くばかりで、だまされぬか何とかもふは、他に助かる道のある場合のことである。源空聖人は四十三迄他の藥を飲んだが到底駄目だとわかり、遂に善導の一心專念彌陀名號の御文によりて始めて安心なされた。何れの行も及び難きものを助けやうとの慈悲である。こゝが如何も頂けぬのであります。

彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、他人のことではないのであります。

眞心を開闡することは大聖於哀の善巧より顯彰せり。大聖とは釋尊、釋尊の仰せ、釋尊の仰せが阿彌陀佛と一致して私共を救はんとするやせなき、御慈悲である。此の事は終りの方に阿闍世王入信の處に「茲を以て今大聖の眞説に據るに難化の三機、難治の三病は大聖の弘誓をたのみ、利他の信海に歸すれば斯を於哀して治し、斯を憐憫して療し給ふ、喩へば醍醐の妙藥は一切の病を療するが如し」との文があります。これが大聖於哀であります。善巧とは阿闍世王が信仰に入る経路であります。『懺悔録』に委敷あります。

我阿闍世王のために涅槃に入らずとの御言葉は、一番悪い息子の歸つて來るのを親が待つて居て下さるのである。阿闍世王とは煩惱具足のもの、未來の五逆の我等の爲止まりて我涅槃に入らず、常住して救ふぞ、必ず手引すると仰せ下るのである。

實語甚微妙 善巧於句義 甚深秘密藏
こゝに始めて善巧といふ文字があります。曇鸞大師も善巧といふ事は云はれたけれども、然し殊に御本書によくそれがあらはれてある。大聖釋尊が阿闍世王、即ち末代の惡人を棄て給はぬ如來の御手引といふことをいはれたのである。私は御慈悲に入つた當時は書物に依るとなく、二三年の間只所信の爲に活動して、西洋で初めて適切に大經を拜讀し、歸つてから御本書を讀んで見れば、全く自分の事を書いてあるのである。阿闍世王の事は自分にその儘である。此阿闍世王が、かゝる遣る瀧ない大悲に依り救はれたは、全く大聖於哀の善巧である。次に氣附いたのは、「誠知悲哉愚禿、沈沒於愛欲廣海、

迷惑名利大山、不喜入定聚之數、不快近真證之證、可耻可傷矣」御開山はつさき阿闍世王のことを自分だと御思召なつたにちがひない。御本書の始りにも、阿闍世王の事が出てゐる。阿闍世王とは御開山聖人自身の御自覺である。私の考ふるに現に阿闍世王とは私自身の事である。身は病みてありしが佛の月愛三昧によつて先づ癒され、それより心に及ぼし給へる阿闍世王と同じく、私も病を癒されて後心を安らかにして戴いた。「大聖の〴〵もろともに、凡愚底下のつみひとを、逆悪もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。」

こゝに我を御見捨てなく、如來は御迎へ給ふのであります。逆悪もらさぬ如來の誓願に方便引入して、何を御知らせになるか。全く慈悲一つを御知らせ下さるのであります。私は明かに感じました、理屈ではありませぬ。私は此書物を拜讀した時に私の入信當時の事だと思ひました。其後私の一身上に或問題があつて具體的にひしひし御導きを感じたのであります。自分に對する佛の廣大な御手引より、私に知らずる爲にかくまでもいろ〴〵にして下されたかと善巧方便を人生の事實上に感じたのであります。「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を、發起せしめ給ひけり」釋尊の阿闍世王に於る、皆大聖於哀の御手引であります。然し茲は事を分けて言はぬと誤りに陥つて信仰上の人生觀を根本から壞す様になる。私は阿闍世王の様な悪い事をしてきたとは思ふたが、其自分の悪いのが佛の手引だとは思はない。阿闍世王の信仰に入ると同じ様に周圍に種々の手引が起りて信仰に入らせて貰つた。然しながら私に悪い心の起るのも御手引である

す。手引には意味があります。處が近頃信仰をそつちのけにして手引と云ふことを大層云ふ様になり、濫りに善巧方便といふ事をいひます。されば或一面では佛の御手引といふことを人生上でいふてはいかぬ等といふ様になりました。これ亦いけませぬ。手引によりて何を知らせて下さるのかといふと、逆悪もらさぬ誓願をしらせて下さるのである。私はほんとうに思ひます。親鸞聖人の一代の間、眞宗を開かれたのは何かといふに、明了にいへば破戒の者を助けるのは、佛の本願、實に破戒の親鸞であるといはれたのである。今日の人は聖人は自ら破戒の容を示された、と云ふけれども、示さうと示されるものではない。自分はどちらでもよいが末世の凡夫のため破戒の姿を示さうとしてはかゝる信念は起るものではない。「御傳鈔」でも六角堂へ聖人が參籠された時救世菩薩の告命をうけて、家庭的宗教を開かれた。これは佛の告命である。之を人が前後左右出來ぬ。是は是我誓願なり、善信此誓願の旨趣を宣説して、一切群生に説き聞かしむべし云々」在家のまゝて佛の御慈悲を知らせよとの如來の御手引を感じ、其爲に流罪に處せられても安んじてこれを受けることが出來たのである。これが親鸞聖人が眞宗を御開きになつた大聖於哀の善巧方便であります。

又御子に善鸞上人がありました。其方は佛の御誓願の眞意が解らぬ爲に、聖人は御子を勘當されました。如何しても御本願のやるせなき思召を人に知らせぬ置かぬとの御心で、御子でさへも勘當されました。決して佛天の御計らひ等と打捨て、なげやりにはされません。即ち、かくの如き御慈悲のわ

などの念は一分一厘も起らなかつたのである。實際自分は一分も善い事はない。其善くないものを助けて下さる佛であるとの自覺が生じたら、阿闍世王の惡逆も佛がさせたのである等との思が決して出るものでない。近頃世間に佛の光佛の手引、善巧方便など云ふことが頻りに言はれる様になつた。私が思ふに善巧方便等云ふことは抑々私が云ひ出したのである。然し乍ら今日世間で云ふ如き一般の意味で云ふたのではない。私は其時は或事柄につき極具體的に佛の御手引をあり〴〵感じたので、世間の事は皆何事も佛の御手引であると一般的と思ふたのではない。私が悪いために、佛が永々右に左に御苦勞下されたのであると感じたのである。即ち云ひ換へれば私が悪い爲に佛があらはれて下されたのである。其時私は佛天の御計と云ふ言葉を使ひました。こんな事は今迄人の言はぬ言葉である。私は其時此御言葉を「御消息集」でよんで、親鸞聖人の御實子善鸞上人が聖人の信仰のあとを亂された。其時に聖人が佛天の御計らひに任せるべしと仰せられた御言葉が實にありがたいとおもひ、此文字を用ゐたのである。これは浮いて言へる言葉ではない。よほど深きありがたい思召の上から出てきたる言である。世間の一般の事につきて、迂濶にいへる言葉ではないのであります。かくいへばとて人生上に佛の御手引は慥にある、否あらねばならぬと私は慥に信ずる。あればこそ人が信仰に入るとが出来るのであります。大聖の〴〵もろともに、凡愚底下のつみひとを、逆悪もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり。

色々の出來事は皆この大悲を知らずための手引であるのであるからぬも佛天の御はからひなど、浮いたことではないのであります。悲哉愚癡愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚之數に入るを喜ばず眞證の證に近き事を樂しむ、耻づべし傷むべし」と、自分こそ阿闍世王である、實に耻づべし痛むべき身であると懺悔され、如此きものを見捨てず助けて下さる御慈悲と喜ばれたのであります。て私は大聖於哀の善巧をよく申しましたが、今日の人の言ふのは私の云ふことを充分了解せずして一般的の論にしてしまふ。やるせなき佛の親心知らず爲にかくまでも手引して下さるといふことがわからぬ。是私が人のことをいふのではない。此事については思想上に散亂をきたすことがある故云ふのであります。又此の阿闍世王のことは入信當時の事に書いてあるは勿論なれど、此頃始めて氣か附たのは、「歎異鈔」の第九章に

然るに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのこときのわれらがためなりけりとしられていよ〴〵たのもしくおぼゆるなり、

此煩惱具足の凡夫は入信の時飛び上る様に喜んでまたいゝ〴〵煩惱の雲に覆はれてしまふ事誠にあさましきことなれど、かくの如き煩惱具足の凡夫の我らなればこそと、聖人も自ら煩惱具足の凡夫と、八十才の時も五十二才の「教行信證」にも「悲哉愚癡愛欲云々」と、いつも煩惱熾盛の凡夫なればこそと喜ばれた。

しかるに煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのこと、みなもてそらごと、たわごととあることなきに、たゞ念

佛のみぞまことにてはまはします云々。
此世はそらごとたわごとまことあることなきに、念佛ばかりはまことであるといはれてある。阿闍世王のみではない末世のわれらみな同様淺ましきものである。されば「阿闍世とは煩惱等を具足せるもの也」と仰せられてあります。阿闍世王とは人の事ではない、今現にかくの如く煩惱具足せるわれら一人一人が阿闍世王で、共に佛の御救ひにあづかるべき身であります。

他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけり、云々。死なんづるやらんと心細くおぼゆる事も云々。

これ亦阿闍世王が入信の時

如來は一切の爲に常に慈父母となりたまへり。世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふこと人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如し。

とある。我等が煩惱の爲に狂亂してゐるのを見たまひ、佛亦ジツトして居られずに種々に恰も人が鬼魅に著せられて狂亂するが如く種々に善巧方便して導びいて下さる。是皆善巧方便の御手引であります。

然るに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈んで淨土の眞證を知らず、定散の二心に迷ふて金剛の信心に暗し。

自性唯心とは哲學とか、又は多少信仰に心がけてる人でも理窟的になつてゐる人は眞に人格的の佛の恵に眞徹することが六ヶ敷い、佛のめぐみ極樂のことがありがたくなれぬ。迷が去るのは如來のやるせない思召からである。佛の土は光明土である。佛は盡十方無碍光如來である。自力ならば此土で悟る

味はへば味はふほど、ありがたしい。

今日は勿論御文をすらすらと讀まぬと進まぬから讀みませう。

顯淨土眞實信文類

愚禿親鸞集

文類は文集であります。皆さん聖教など讀み書き抜き集めなさることもありませんが、このやうなものと思ふてよろしい。併し親鸞聖人の文類は、私共のノートとは違ひます。御文類ある上はさう理窟云ふてなく、信仰の筋道に集め列れられるが故に、昔から御引用の文は味はず解釋に力を入れるも、聖人の御意にかなはず。聖人の御思召は文に重きを置き、御自釋はそれを讃嘆をせられたといふことを云ひたいと思ふ。

初め教行信證と四つに分ち、それに、眞佛土、化身土とある、共に六卷であります。其中信の巻は上下ありますが長いからであります。初めに分本して、それに三經、異譯を始めとして華嚴、涅槃、其他の諸經、論釋、種々のものより引いて書き並べられてある。法然聖人の『選擇集』は恰も一切經を纏めて三經の外御書きならぬ。殊に善導一師によりて一心專念の念佛一つにして、聖導門、戒律等皆棄て、しまひ、唯、南無阿彌陀佛だと云ふ云ひ方であります。

親鸞聖人はそれが積極になつて、其南無阿彌陀佛を味はつて見れば、この經にも、あの經にも皆此南無阿彌陀佛が斯やうに説てあると仰有るのである。法然聖人の棄てられた御言葉が、親鸞聖人には皆信仰の言葉となつてあらはれたのである。即南無阿彌陀佛の意味を凡ての經に求めて一切經を御集

のである。が娑婆に對して佛の淨土があるといふ淨土の眞證は他力に依て明かになるのである。自力だと唯心になるのである。理窟では疑ふ人は無けれども、實験上人格的の強い眞の救濟は味はず、廣い意にすると、淨土の眞證がわからないうが信仰の一念に明かになるのである。定とは眞想、散とは實行、これ等を主にすると眞の大慈がわからない。眞の大慈に氣附いて見れば、「爰に愚禿釋鸞、諸佛如來の眞説に信順して云々」實に森嚴な御言葉ではないか、一面謙遜のやうなれど一面非常に自信力のある言葉である。諸佛如來の眞説に信順するといふは如何にも廣大なる自信にまします。聖人一代勸めたまふ信心は釋尊眞説の經文により、天親菩薩の淨土論によりて、三經の本意信心を主とし、一論の正意唯一心が肝要であるとの仰せである、信巻に懇々と三一問答をなされて論主の思召、彌陀の願意を明らかにせられたのが信巻の御精神であります。實に聖人一代の御教化は此眞實信の一つであります。

三

御本書はまことに貴き書故、私共が勝手に讀むは如何なるも、御開山聖人は覺信尼公に延べ書を渡されたることがあります。『花蘭文庫』の中に

「師父聖人の御片身として殘しおかれたる廣文類の御延書まことに讀む度に身の嬉しさ心の冷しさ」とある。いかにも讀む毎に冷しく嬉しくとある故に、意味極りなく深きも、併ながら頂きやうでは輕るく御文の通り文面文句の儘が難有きゆへよく

めになつた。嘆異鈔の十二章に「他力眞實の旨をあかせる、もろくの聖教は、本願を信じ念佛を申せば佛になる、そのほか何の學問かは往生の要なるべきや。」他力眞實の旨をあかせるもいろくの聖教とは、即ち教行信證の事である。凡ての聖教それは何かと云ふに本願を信じ念佛を申せば佛になると書いてあるばかりである。その本願を書いたのが教巻、世に教多くあれども、皆向上の悟りて其教の通り、吾人は出來ない。出來ない人間のより集まりの娑婆だからそれを助けやうとの大悲の願力があるとの教こそ、教として眞の教である。法然聖人は聖淨二門のうち聖を捨て淨土をとられたのである。聖道門と云ふのが假であつて本當ではない。

聖道權化の方便に

衆生ひさしくとまりて

諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ。かくの如き罪深き者で本當に如何しても聖道門は出來ぬ。「唯佛一道淨くまます」唯佛の一道は眞實である。此罪深きものは他の道を捨て、此道をとると云ふのではなく、他の道は無いも同然である。たゞ此一道あるのみ。十方三世の諸佛と雖も此彌陀の本願を説くために、現はれたるのみである。これは我法尊して云ふのではありません。此本願を信することを書いたのが信の巻、念佛申すのが行巻である。

謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり大信あり。

口には南無阿彌陀佛、心には信心即本願を信するなり念佛する行があらはれてくる。佛より興へられたる大行大信である。口に南無阿彌陀佛と稱へて信する行、信じて南無阿彌陀佛を稱ふる信、即ち信より行、行より信皆一つである。甘いと食

べたとは離れぬやうなものである。全體教行信證四巻として別のものではない。信ずると云ふも南無阿彌陀佛一つを離れたことではない。念佛と云ふも信心を離れない。四巻とも玉の如きものである。豆腐を四つ並べたやうに別のものではない。其教行信證皆まことが主で、本願を信じ念佛を申さば佛になる、念佛成佛は眞宗、眞淨土眞實教行信證、皆眞實の法を説き給ふのである。其眞の佛、眞の土を書きましたのが眞佛土であります。其眞實を知らずして假に佛になつたり、眞想をやつたりするの方便化身土である。かやうにして眞宗の教が出たのである。念佛成佛は眞宗、萬行諸善是假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ。教行信證あれども、こゝは信の一念のところを書いてあるのである。

至心信樂の願

教は願から始まります。行は十七願、信は十八願、證は十一願、眞佛土、化身土は十二、十三の願、それに二十二の願が還相廻向皆本願から割り出して書かれました。て親鸞聖人を非常に頭の明晰な方とも云ふ。これは教行信證を組織的にチャンと綴られてあるから、其眼を以て見れば、皆明晰となる。又一面親鸞聖人ほど愚な著述ボンヤリしたことを書く人は無いと云ふ者もある。かく兩方に見るもの、評が異なるは何故であるか、組織と云ふも理で切り盛りした組織ではない。眞の徹底の信仰上の組織である。本願の上より總てのものが組織出来るのである。又朦朧として居ると云ふのは、玉の如き温潤含蓄の信仰だから、假に分けて云ふのみで、渾沌たるものである。學問的にいへば、渾沌たるものである。信仰的に總

てが煩る要領を得て居るので總てを解決出来るのである。されば信を得たる人を佛は廣大勝解者と仰せられる。人生瞬間に夜が明る。實に要領をえて居ります。信仰は情的のものだ等といふ考が随分世に行はれてある様であるが、此の如き偏頗なつまらぬものではない。智慧の念佛とも申します。しかし冷やかな理性ではない。そのすき通れる無分別智のなかに無量萬徳の味があります。渾沌玉の味があります。それ故に仰の解らぬ人から見ると朦朧と思はるゝのである。

至心とは誠、信樂は信じ愛すること、欲生は佛のところへ生れんと思ふ、即ち至心信樂して我國に生れんと思へと佛より云ひ下されるのである。誠は私の方でする前に佛先づまことと思ふと仰せられるそのまこと、又其まことは私の方でまことにならぬのを觀そなはして、佛よりして眞ならざるものを見捨てたまはずして眞にしたまふが即ち佛のまことであります。信樂は佛より疑はず、大慈大悲の御心をかけて下さる。欲生とは此方より生れんと欲ふ心のなきものに、生れんと欲へとの願力により、仰せのもとに目がさめるのである。

正定聚之機

邪定聚、不定聚に對し正定聚と云ふのである。即ちスカット御慈悲に安心して初地の菩薩は退轉せぬと同じく轉退せなことをいふのである。機と云ふことは私共の心の状態であります。法は如來の御心、それで正定聚とは決定した人間の機類、至心信樂の願に依て信仰を得たものが正定聚の機であります。

謹案「往相廻向」有「大信」大信心者則是長生不死之神方、忻

淨厭穢之妙術、云云

聖人が教行信證を書き給ふに二大綱領がある。「本願を信じ念佛を申さば佛になる」これは往相廻向である。佛の境より又我等を哀れとおぼしめして再び人生の林にあらはれる、これ還相の廻向と云ふのであります。故に我等の人生の中に還相の人が現じて下さるのである。煩惱の林に遊んで神通を現じ生死の藪に入りて應化を示す。即ち煩惱林中に救ひの人來りたまふ時、苦惱多き處に其中に縦横に佛の光が現はれて下さる、之が還相廻向の利益である。即ち、本願力廻向に依て大會衆數に入ることを得るは往相の廻向で、既に佛となりたものが迷へるものを救はんとして煩惱の林に救が現はるゝを還相の廻向と云ふのです。此娑婆は有漏である、佛土ではない。然し佛の光は充ち満ちて、煩惱の林に遊びて神通を現じ生死の園に入つて應化を示し還相廻向の御手廻しは絶えませぬ。廻向とは此方にあるものを廻らし向けることである。しかし此方で修行して有する處があれば廻らし向けることも出来るが、悲哉我等凡夫はとて、此方からやることは出来ぬ、自分の出離生死でさへも自分では出来ぬ。久遠劫來、迷ふて居るため、如何にすることも出来ぬ。若し善いことが自分に出来るなら、それを親兄弟なりに、廻らし與へることも出来るが、今云ふ通り、自分の出離もかなはぬ煩惱斗りのものである。然らば何處に出離の道があるか。

自力聖道の菩提心、こゝろもことばもあはれず、

常没流轉の凡愚は、いかでか發起せしむべき。

如來はこれをよく知りたまひ、涙をそそぎ我に向けて御慈

悲をめぐらし、むけて下さるのである。眞宗の肝心は此往相、還相二廻向が他力廻向であります。

一つには往相

書物について居ると了解ばかりして、廻向とは自分自身に對しての御廻向と適切に感じないからいかに。此廻向が戴けたなどいふのは、まだ遅い話であります。直ちに、間違つて居たと氣附くのであります。佛は一刻もはなれず、待ちうけ給ふのである。處がその親心を頂かぬうちは世の中むつかしく、淋しく、何でも自分でせねばならぬと苦しみが、此御慈悲頂くなり、否頂くといふはあそい、やるせなく佛はまつ居て下さつたと氣づかしていたゞくのである。

昨夜も林さんと話しました。六年前から林さんは苦んで居られたが、今日さいてみれば、まことにありがたいばかりである。前には御本願の綱を眼前にぶらさがつてあるが如何してもそれをつかめぬ、こちらからとりつくのではない。遂に林さんは「ではこれから念佛でも稱へませう、もう如何もしてみやうがない」と歎息された。それで私が「そこである、そのでもがいかぬ、でもぢやない、その念佛が如來があなたに稱へさせる爲に丁度あなたのやうな、してみやうなき人に下さつたのであります、あなたにはでもだけけれども、如來はそれを、あなたのためにわざ／＼下さつたのであります、」とさくなら、あゝ、さうでありましたかと直ちに安心して、同時に過去現在未來の罪が胸中に湧き來りて、益々あゝかゝる御慈悲であつたかと斯う氣が付いたのがこれが御廻向であります。又小林さんも如何したら信心が得られるかと心配しておられま

したが、一夜床に入つて足をのばして御念佛を申せし時、あ
うして足をのばしたなり、勿體なくも御念佛を申す、こ
の様に心易く稱へさせる爲に、何も行の出来ぬ浅ましき私を
よくしりぬきて此御念佛をたまはつた事と氣づくなり、まあ
何でこのありがたいたいことが今迄わからなんだと氣づかれたの
であります。

此方から何か握らねばならぬやうに思ふて居るから何時迄
たつても安心が出来ぬのであります。念佛でもといふて如來
を此方の道具にしようとしたのが、それがでもてはなく、丁
度そのために下さつたものが南無阿彌陀佛であります。斯や
うに氣づいた時が、何時のまにか、御廻向にあづかつて居る
のである。

法然聖人の御弟子に隨蓮房といふ方がありました。まことに
に恐なる人でありました。法然聖人が死なれるとき、

念佛は義なきを義とし、様なきを様とすたゞ平に念佛す
べし

其意味はたゞ御念佛を稱へればよい、たゞ平に念佛を
せとの事である。隨蓮房頻りに稱へました。人にもそのことを
話しました、一寸信心のない念佛に聞えるのであります。それ
を人に話をする、その人はそれはおかし、「選擇集」に念佛
の行者必ず三心を具すべしとあると、ござかしく申しました。
隨蓮房成程と思ふ。しかし何だか不安ゆゑ師につきてき、度
くおもへど、もはや法然聖人は御往生後ゆゑ、伺ふことは出来
ぬ。處が幸に夢のお告がありました。それは蓮池に向つた廊
下を通りて参りたる所に法然聖人が念佛して居られました。

生不死の神方といふは一寸突飛な様なれど、曇鸞大師が病に
かゝられて仙術を學んでそれで長生不死の法を得やうとせら
れた。處が道で菩提流支にあはれて、此念佛の方こそは長生
不死の神方といはれたので始めて氣づいて安心した。そのこ
とが「論註」にも出てあります。それから長生不死の神方とい
ふことが出てきたのであります。聖人が磯長の御廟に詣てら
れた時二十九歳で命が終るとの御告をうけられましたのもこ
れと同様で、丁度其年に法然聖人にまゐりて安心して即得往
生、即ち前念命終、後念即生の大信心を得られました。十九
歳の時の告が丁度合ひました。親鸞聖人は曇鸞大師を理想と
して居られましたから、名まで親鸞とつけられました。

又祈禱厭穢は、信仰を得るときに、此娑婆を厭ふの極樂へ行
きたいのと云ふことはありませぬ。とかく多くの人は信仰前
にかく思ふと思ふてゐる。これはあやまりである。そんなこと
は決してありませぬ。聖人は自利眞實、自力ではこれが先であ
る、聖道門には厭離を先とすて淨土門自力に於ては、彼の佛を
慕ふことである。處で他力に於ては佛を慕ふの何のと云ふ處
の私ではない、まことに不實さはまる我等を助けんとの佛の
眞實をさく一念である。結果としてはそれらも出てきますが、
先づ佛より眞實を開かしめらるゝが第一である。

其他十二嘆一々味がある、選擇廻向の直心、利他深廣の信
樂、金剛不壞の眞心、不壞は再び破れぬ。自力をさしはさむ
から易往無人である。世間難信の捷徑と云ふは餘り尊いから
自力では信ぜられぬ。それを他力不思議の御力あればこそ信
ずることが出来るのである。それ故捷徑と云ふのである。信

隨蓮房にむかはれ仰せらるゝには、汝案じ煩ふ所があるなら
うと。隨蓮房如何にもその通りて御座います、實はたゞ平に念
佛すべしと仰せられたものだから、念佛して居りましたが念
佛には三心を具足せねばならぬと人のいはれます爲に、安心
して念佛が出来ませぬ、と御返答申しました。所が、聖人はこ
の蓮の花を人が梅じゃ櫻じゃといへば汝如何。誰が何といふ
てもこれは蓮の花であります。然らば其如く源空が平に念佛
すべしといふたればたゞ平に念佛すればよい、誰が何と云つ
ても間違はないと仰せられた、こゝで隨蓮房がいかにも、つ
まらぬ道へふみ迷ふたものでありました、蓮の花は蓮であり
ます、如來が十方の衆生念佛すべしと仰せられたれば、その
通り深く安心して喜ぶばかりであります。これを「歎異鈔」に
比べますと、

親鸞におきては、たゞ念佛して、彌陀に助けられまゐらすべ
しと、よきひとのおほせを蒙りて信するほかに別の仔細
なきなり。

となじてあります。信心といふて他にあるのではありませ
ぬ。法然聖人は本願のみを説かれ、隨蓮房はたゞハイと其通
り稱へられた。「よきひとのおほせをこほりて信するほかに
べつ仔細なきなり」と信じたのが信心である。信心を得や
うと思ひて居る間は自力であつて、念佛で助けると仰有るま
ゝを信するのが信仰であります。

大信心は則是長生不死の神方祈禱厭穢の妙術
聖人は何時もかくの如く繰り返した云ひ方をせられました。
「信卷」の下にも同様に繰り返された書き振りがあります。長

の一念に一時にわかるから、極速圓融で一時に解けるのであ
る。眞如一實と云ふは、佛の境界皆念佛一つに封じ込めて興
へ給ふのであります。

謹啓、先生には道中恙なく御歸宅被下候由、實は中田方面へ御伺ひ申し度
存じ候處、いんぐの爲に支へられ、遂に拜顔を得ず、残念に候。乍去遠路懸と
御越し被下、特に御親切なる講話拜聴いたさせて頂き、是れ全く大悲よりの御
聲と、雖有御念佛申させて頂き候、實は先生に御わかれ申した其時は、實母
死して以來未だ浮かめざる淋しき思ひをして、何にやら別れが思ひ出し居り
しに、心の底へ誰か言ふ如くに、先生の仰せが浮み、人生に苦しみ淋しき私
を、御親は可哀想であると顯はれて下さる事を頂き、嬉しき御念佛を稱へ、
夫より私の心を御覽下されて、可哀想であるといふ一言が私の金言に御座
候。今回の御講話に多大の御手引きを一般に承はり、村内の人達がいろ／＼と
先生の御熱心の御化導につき、人々各々に喜び、中に小池氏宅の晨朝の前
席を私がいたすのを先生が聞き下されるのを見て、子供が親様の前にて喜ん
で咄するのを先生が御聞きになりてある有様が、親さまが子供の説教を聞い
て居られる如く私は孫かやと涙に咽んで咄もあり、先生には初めて御目に
かゝりし如く思はずと言ひ、いろ／＼と申して御慈悲を喜び申し居り候。此
頃ば學舎の講習會最中に候故、参聴いたし度き思ひも心ばかりにて、大要は
求道誌に承はること、夫を樂しむばかりに候。南無阿彌陀佛くくく

中山 徳 融

告白

求道生活より信仰生活へ

下井香潤

私は永い間、自ら求道者を以て任じ、自分の精一杯をつくしてあらゆる方法を講じ、精神上の満足を得やうと努めて見ました。然るに其間、境遇の浮沈は絶え間なく、思想も様々に轉變して果がない、而も衷心の欠陥は依然として充足されることなく、明暮不平不満の生活を續けつゝも矢張り求道の生活を退うてゐたのです。ところが如何なる不可思議の因縁でありませうか、かゝる懷疑無信仰の私、無慚愧の私が、今日は如來廣大の御恩に感泣せずには居られぬやうになつたのです。今日に於ては、從來私の頭惱を不斷に苦しめてゐた人生上の疑問が根本的に解決せられ、衷心至奥の要求は徹底的に満足せられた心地がしてゐます。自分ながらこんな有難いこととはないこんな幸福なこととは思ふと共に、亦こんな不可思議の事實はないと思つてゐます。私のやうな奮闘努力主義の人間が他方佛恩に感泣するとは鬼の念佛とでも云ひませうか實に天下の奇蹟であります。私が如何にして求道生活より信仰生活へ入るに至つたかといふ其入信の心的經驗を語る

ことは私の喜んで願ふところでありませんが、どうも口不調法で思ふ急所が語り得ず、筆不精で心一杯の味ひを書き表はすことが出来ない。のみならず私は本來虚榮心が頗る強い性質であるから今日と雖も昔日と同様であつて、自分の罪惡や煩悶の数々を一々具體的に打ち明けて他人にお話しするだけの勇氣がないのです。他人の面前に告白するに當つては、一々の事實を擧げて話さねば他人が真に自分の入信の實情を了解して呉れるものではないと知りつゝも、矢張り私はどうも死ぬる間際まで自分の體裁を繕はんとする氣が失せぬのです。私の罪惡煩悶の事實は他人の前に堂々と告白することの出来るやうな立派なものではないのです。それ故今こゝに告白することも抽象的に失して、讀者諸兄弟の御了解に苦しむ點が定めし多いことと思ひます。がどうもこれは自分ながら致し方がないのですから、其邊は諸兄弟の御賢察を願ふより外ありませぬ。

一

私の入信の經過を述ぶるについては、下らぬことの様ではあるが、先づ私の半生の經歷をざつと申し上げねばならぬ。私は信川山間の一小都會に生れたるものであります。家は數ふるに足らぬ眞宗の一小寺院であります。併し父が自分の無學に苦しんだ爲め私には専ら學問をすゝめ、色々と無理なる工面をして私を京都の眞宗中學へ入學させて呉れたのは明治卅二年の秋でありました。初めの間は一切萬事を抛つて一心に勉強をしたので、學校に於ては常に級の上席を占め、先生

方の屬望も厚かつたやうに思ひます。其頃の私の思想は斯うでありました。自分は貧寺に生れたるにも拘はらず、父母を初め多くの人の恩恵によつて月々豊かなる學費を給せられて居るものではないか。是等の人々に對する報恩の道は如何、唯それ學を勵み名を擧げ立派なる宗教家とな。學者となるより外はない」と。そこで自分は身體の健康如何をも打ち忘れて勉強努力した。中學三年の半途國元の母に死別悲觀の極に卒業することが出来た。卒業後は學費の欠乏により直ちに社會に出て、生活の道に着かんとしたのであるが、學長や其他の恩人に勸告せられ三十七年の秋東京巢鴨の眞宗大學へ入學することになった。豫科二年間はどうかにかこうにか老父が苦心を盡して毎月相當の學費を送つて呉れたのであるが、本科一年の中途に至つては一方に於ては學費が全く欠乏を告げ、一方に於ては病に冒されたので残念ながら斷然退學して一先づ故郷へ歸へることとした。然るに諸恩人の切なる勸告を受け毎月學費を惠まるゝこととなつて再び復校すること少

來感化院に奉職して今日に至つたのである。以上が私の平凡なる半生の歴史であります。

二

時、突然兵役に徴せられて習志野兵營に起臥する身となつたので、從來の希望も計畫も一時に打破せられ失望の極に達したのであるが、幸か不幸か數十日の後に病を以て免除せられ再び學窓に入ることを得たのである。斯くの如き迫害多き生活を経て前後六年間の日子を費し、昨年六月漸く眞宗大學を卒業することが出来た。卒業後の方針については恩人先輩は悉く進んで佛學の蘊奥を究はむべく求めたのであるが、私は自分の當時の主義の上から、是等の勸告に背いて昨年九月以

私が人生問題に初めて深き注意を拂ふやうになつたのは、眞宗中學四年の時からである。當時稻葉學長が倫理の時間を擔任せられて「トルストイ」の「人生觀」を講述せられたのを記憶する。それが私をして人生問題に對する深刻なる反省を起さしむる最初の動機となつた。人間の活動は自己中心であるがために争闘、陥穽、呪咀、怨恨等あらゆる罪惡は充滿して現在目撃するが如き濁惡の人生を曳するのである。されば如何にして此汚れたる世を轉じて清淨平安の樂土たらしめ得るか」といふが「トルストイ」の人生觀の根本問案であつた。私はこの講義を聞くや痛く心を動かして、最も眞面目にこれが解決を考慮した。然るに卜翁の解答は斯うであつたと記憶する。「かゝる争闘の世界を轉じて平安の世たらしむるには、先づ個々の人間の立場をして利他本位たらしむればよい。個々の人々が自己の爲めを計らずして互に他のためを計らば人世は平安和樂の土たるに至るは自然の理である。而してこの愛他の精神を力説するものは實に「キリスト」其人である」と結論してあつた。理想的にして而も理性的なりし自分はこの明快なる結論を得て非常に愉快に感じたものである。進んで五年級の時には學長は親友清澤先生の愛讀書なりし「エビクテタスの教訓」を講述せられた。峻厳痛快なる克己主義の哲理は理性的にして霸氣滿々たりし私をして一層の元氣を振ひ起

さしむるに至つた。私は當時同級の何人よりも是等の問題に對して深き興味を有してゐたのである。これ思ふに私はモト貧家に生れ境遇の壓迫を受けながらも常に身分不相應の理想を抱いて、絶えず逆境に反抗して前進せんと努めてゐた。然るに理想と境遇との矛盾は自然の結果として、人生に對する不平不満の念を起さしむるに至つたのである。其時に當つて偶々學長の深刻なる宗教的講話に接し、自己平生の鬱勃たる不満不平は爆發するに至り、通常の青年以上に深き興味を以て人生問題に没頭するやうになつたのであらうと思ふ。

四

一度人生の疑問に囚はれたる身は如何にするも容易にこれを脱することが出来ない。眞宗大學に入るに及んでも最初の間は決心の臍を固めて學問研究に専注せんことを自らにも誓ひ人にも約したのであるが、いつの間にか學問の無味乾燥に堪へずして、不知不識の間に我が心は深き思索にふけるのであつた。それがために私は屢々苦悶せざるを得なかつた。自分が今多くの恩人に學資を仰いでゐるのは學問研究を期待せられて居る故ではないか、然るに自分は之れを等閑に附して只管信仰問題に耽溺するは恩人に對して實に濟まぬ次第ではないかこんな風に幾度か繰り返へして考へて見た。然しどう考へて見ても私にとつては學問は第二義第三義であつて、人生問題の根本的解決が第一義であるといふ結論に到達せざるを得なかつた。たとへ父母の意に反し恩人の心に背くとも、自分は一生を賭してまでも自己の確信する求道生活を慕進然

根本的に自分の疑惑を解決さしては呉れなかつた。近角師や住野師や多田師などの法話も屢々聞いたこともあるが、其云ふところが自分の衷心に觸れないので遂には他人の信仰談を聞くの無益なるを知つてそれ以來は専ら一人で思索することをつとめて見た。

五

明治四十二年の春頃から我々と思想の態度方向を同ふするものが集まつて、人聲社と稱する求道の會合を組織した。其主張する所は大略次の如くである。「今日の宗教家を見るに其云ふ所は徒らに超現實的にして、現代人の中心問題とは更に没交渉である。吾人は現實の問題を解決すべき宗教を要求す。舊宗教舊道徳を其まゝ傳承するは盲信的態度である。吾人は進んで是等の信仰や道徳を批判し撰擇するの自由を有する」といふのである。従つて自由、健實を尙び合理的、經驗的といふことを標榜したのである。かくて人聲社同人は周囲の批難迫害をも顧慮せずして、唯一眞面目の求道の團結を以て自任し、盛に信仰上の討議研究を重ねたのである。人聲社創立以來二ヶ年間に亘つて、私自身の思想は幾度となく小波瀾を畫いた。初期の間は私は最も自由にも健實にも新信仰の樹立を試んと努めた。「現在の吾人にとつて最も確實なる實在は現實の人生である。現實の人生中最も確實疑ふ可らざる事實は現在刹那に於ける自我の存在である。自我の存在は何等の證明をも要せざる直感自明の事實である。されば絶対不動の宗教的信念なるものにして存在すとせば、正にこの自我の存在

ねばならぬといふ決心は嚴として動かすことが出来なかつた。されば教場にて宗餘乘の講義を聞いても心理哲學の教授を受けても、其他如何なる種類の書を読み話を聞くにつけても、私はそれを單なる學問として學ぶことが出来なく、いつも其中から或る眞理を發見せねば止まぬ、人生問題解決の端緒を發見せねば止まぬといふ考を以てこれに向はずには居られなかつた。

眞宗大學豫科在學の頃である。偶々伊藤證信氏が大日堂に籠つて無我愛の眞理を宣傳するを聞き、直ちに走つて其説を聞いた。然るに氏の人格と其教説とが尠からず私の心を動かしたので進んで熱心に其教を乞ふた。其時に於ける私の求道の態度は熱心といふよりも寧ろ狂的であつた。或時は數夜睡らずして思索に耽り、或時は數日食はずして端座冥想し、斯くして遂に所謂無我愛の眞理なるものを證得したのである。過去の宗教と異りて人生問題に明快なる解決を與へしこと、日常生活に判然たる方針を示せしことが其主義の私の要求に適うた所以である。其後幾何もならずして無我愛同人一般の信念は漸く瓦解し來るとともに、私自身の實感もいつの間にか消え失せて、不平不満の昔に返つてしまつた。けれども其後と雖も絶えず哲學宗教の書物を耽讀してゐた。學校の勉強の方はそれがために不注意に陥り勝ちであつた。特に清澤先生、近角先生、エビクタラス、トルストイ、貝原益軒、二宮尊徳等の著書は最も注意を拂つて熟讀玩味したのである。是等の人々の主義は夫々私の思想變遷の時代を支配したのである。せしなから、何れも自分の要求の一分を満足させたものゝ、

六

人間の努力には限定がある。人は無信仰的狀態にあつて永く眞面目なる求道生活をつゞくることは至難である。新信仰を求めて得られず、而も境遇の壓迫は更に容赦がない。私は單調なる求道生活に時に倦怠の感を起すやうになつた。内心の欠陥を充たさんがために新しき刺激を要求すべくあらゆる方面に走らざるを得なかつた。學問に金錢に名譽に戀愛に感覺的欲望に、情意の向ふ所に自己の満足を得やうと試みた。墮落も罪惡もあつたものではない。もとより人生の根本問題に疑を抱く我れである。其方法は是非善惡はもはや論ずる限りではない。只自己の満足を買ひ得れば足るのである。人生々活の意義目的は畢竟するに各人が自己の最大満足を得するにあるではないか。

されど凡ての試みが徒勞に終り、自己の運命の益々非なるを見た時、私は心の底から嘆息の聲を放たざるを得なかつた。さすがの自力我慢の私も今や失望落膽せざるを得なくなつた。

私の求道生活を一貫せる思想は要するに現實生活の上に直ちに意義と價値とを認めて人生に安住せんとする努力であつた。「吾人にとつて唯一實在たるこの人生、これを否定し去つ

たならば宇宙何ものか頼るべきものがあらうか。舊宗教の吾人に懐らざる所以は、この唯一實在たる人生を輕視し空想世界を夢想して僅かに消極的安慰に満足せんとする點である」と。これが私の思想の根底をなしたのである。然るに今や私の唯一生命たるこの根本思想が事實のために根底より破壊せらるゝに至つた。私の人生は前途また一點の希望も光明も認められぬやうになつた。私の苦痛は一通りのものではなかつた。

本年五月二十七日寂莫の餘り九段佛教俱樂部に近角先生の法話を聞いて來たが、どうもヒツタリと自分の衷心に觸れないので快々として自宅に歸つた。其夜私は再び救ふ可らざる絶望悲觀の念を抱いて一室に身を横へた。私の唯一力と頼みし人生は今や暗澹として一點の光なく、前途たゞ死の惡魔の磨くのみである。其時「大悲の如來はかゝる絶望悲觀の私を助け給ふのではないか」と一念私の念頭に浮んだ。刹那、如來のやるせなき大慈悲心は猛然たる勢を以て私の骨髓に透徹した。宛も銳利なる錐を以て全身を抉ぐられたやうであつた。慚愧と歡喜との涙が交々雨の如く落ちた。私は未だ嘗て深き罪惡觀に打たれたことがない。然るに此時以來は自己の罪惡深重煩惱熾盛の感を否定することが出來ぬやうになつた。現實の人生に光明を認めんとし、自己を修養向上せんとしたは總て謬りであつた。不可能の事を遂げやうと企てたのである。人生は永久に火宅無常の世界である。自己は本來煩惱具足の凡夫である。さればこそ如來は大悲を垂れてこれを救はんと誓ひ給ふのではないか。

かくて私は永年求めて止まなかつた衷心の満足を得、人生至奥の意義を味ひ得て、内心の歡喜満足は實に喩ふるにもない。

其後聖教を拜讀するにつけても、又近角先生などの法話を聞くにつけても、一句一言が胸にこたへて悚然として思はず襟を正すのである。

七

私が佛の大慈悲に呼び覺まされたとき、第一に私の胸を衝いたのは、私の過去の生活方針が全々謬つてゐたといふ感じであつた。次で過去の生活に對する罪惡後悔の念が烈しく起つて來た。あゝなぜ自分はモット早くこの御慈悲に氣付かなかつたのであらうか、なぜ自分はあんな淺間しき生活をしたのであらうかと痛恨腸を斷つと思ひがあつた。然しながらそれと共に私は亦斯ういふ風にも思つてゐる。私のやうな自力我慢のものは斯かる求道生活の經驗をなし、斯かる罪惡非道の行をなし、斯かる悲惨なる運命に遇はなければ今日この尊き御慈悲に遇ふことが出來なかつたであらう。こゝろいふ風に思へば自分の過去一切の經驗は一事と雖も徒勞ではないと味はるゝのである。

私が自ら求道者を以て任じた時には、自分ほど眞面目に道を求め眞理を探究するものは無いとまで信じてゐた。然るに今日よりこれを振り返へつて見ると、私の求道生活は實に不眞面目にして餘裕が多かつたと思はざるを得ない。自ら求道者と名乗り出る如きは抑々不遜の極である。

信仰書簡一章

柏原あき子

私が道を求めんと努めた時は却つて道に遠ざかつてゐた。「我れは求道者なり」と意識することが既に切實に道を求めて居らぬ證據である。私は道を求めんとして道を得ることが出來なかつた。否、却つて絶望苦悶の淵に陥つた。かくて絶望悲歎の極、道を求むること能はず、眞理を究はむるの望みを失つた時、思はざるに期せざるに如來救濟の大道は私の前面に開かれたのである。

以上は私の求道生活より信仰生活への經歷であるが、自分の實感を筆にすることは至極困難であつて、思はず知らず修飾やら誇張やらが雜つてならぬ。私の望む所は寧ろ直接人と相對して打ち解けて赤裸々に語ることであります。(七月十八日書きをはる)



御玉章ありがたう拜しまゐらせ候。殊に此度は不思議なる御手引にて毎々御席末をけがし參らせ、尊き御話承る仕合せなる身とならせ頂き、其後とても心安さき日を送りおり候と何と申上げまゐらすべき言の葉もなく、たゞ廣大なる御慈悲を謝し奉るのみにて候。つきては求道へ告白せよとの御仰ありがたきことに候へども、とても拙き筆には盡しがたき身の愚まして御すくいいたゞきしも、きのふけふなるに尊き御法誌けがし參らする價値もなきをくゞと書きならべ候は、かへりて罪ふかき心地も致し候へば、まげて御ゆるしたまはり度候。此間も申上候通り幼少よりの家庭の習慣ほどおそろしきものはなく、何事も周囲よりの壓迫にて己てふ一心にきたへ上げられたる我慢の性、自分にあすも知れぬ露よりもろきを省みるいとまもなく、世の中は自分の決心一つにて出來ぬといふとはなしと獨きめ致し居り候くらゐなれば、萬事、其筆法にて、何かの書物を其まゝに、人様にはかくせねばならぬ、親にはかくつかへねばならぬ、良人にはかく、婢僕にはいかに慈悲ぶかくせねばならぬと何等の慾望も苦痛も辛抱もせねばならぬ犠牲もせねばならぬ、いかなる不利益も省みず人には好意も盡さねばと、常々どんな事を致しても、それを恩がましく申しなば、其親切は何の役にもたゞぬ、人の私に報ゆる心のたらぬとくゞ申すくらゐならば、寧ろ初より手

を出すなど、良人より訓誡され候へば、人様に盡したることは無理にも忘れねばならぬと、これが皆人の道と思ひすまし居候。只今考へ候へば、一日も眞の安心とはなく暮し居りし處、昨年妹死去の際はじめ、人間以外に廣大なる御力おはしますことを、まのあたり見せて頂きながら、未だわが身の罪にはこゝろづかて、たゞ一足飛びに佛陀の御手にすくはれたる心地にて、恐れ多きことも心つかて、人様にまて實に如來様は有がたいなど獨合點に喜こび暮り候ことの淺ましき。能々佛哀れみ給ひてや、此度、何やら、御待ち下さる御方あるかのごとき心いたして、妹一周忌にもあり旁、學舎へ參上いたし、引つゞき御講話拜聴いたし候處、私は實に驚き呆れ申し候。そは今迄、心の奥深く藏し居たる、不安なる心を皆、先生は御見ぬき下されて、私一人のため、御説き下さるかのごとくかんじて誠にびつくり致候と同時に、嗚呼かくまでに數ならぬ私のため御苦勞下さる、御方様のおはしませしか、眞の御慈悲に心づかぬとは申しながら、よくもよくも、づう／＼しく自分獨の善人顔の淺間しさ耻かしき、御法誌にても拜しながら氣安めに讀ませいたゞき居候となれば、尊きをしへの分らむよしもなきに、なんだか分つたふりを致したり、廿何年かの日暮は皆はかなき名譽心のためあくせく致居たりしかと心づきたる一刹那、私は思はずも聲をあげ、心底よりあやまり入り候。たゞもう耻かしいやら、つらいやら、かゝる愚痴、無智、殊に雜毒の行に世をあざむき居たるごとき極悪深重驕慢極りなきとは人事ならて、皆我身の上なるにこれを見捨てたまはず、尊き御光に氣づかせ下されしありがたき、

御蔭様にて難有き御法味を戴き、感謝の外何物も無之候。少からず御法縁に會ひ申し候へ共、昨夜位深酷に感じ候事無之、生來餘り涙流し候事無之候某、年來の溜涙を流し、神聖の御座を汚し恐縮の義に奉存候。御暇を致し候後、棧橋迄念佛相續け、夢、如くに罷越候。今朝寢覺の難有き言語に絶し申候。日頃、篋底にのみ安置致し居り候護身佛の御名號を取出して、室壁に掛け奉りて、心行く計り拜禮を遂げ申候。幾久敷き間の御照覽、御心遣ひと、勿體なく漫に涙下り候。御意に依り持合せの『歎異鈔』を取出し、「各々十餘ヶ國」の行を拜讀、又候止途なく涙流れ申候。亡父死歿の際にも斯様には涙流さず候（固より他人の手前もあり、又決して外道へは墮し居られずとの信念も聊かあり）ひしが、此節の涙脆さ、甚だ一驚を喫し申候。定めし今頃は心情如何にやと、御心に懸けさせられ候事と察し、茲に禿筆を呵し、今朝迄の經過を相述べ申候。亂筆は幾重にも御免玉はり度候。此度の御縁の事、郷里老母へ申聞け候はゞ、定めし涙に咽びて相喜び候事ならんと嬉敷難有く、又悲敷奉存候。

筆頭に一寸國風めきたるもの書き連ね置申候。御笑覽被下度候。何れ其内御縁を蒙り度奉存候
八月十八日



がた／＼と身の内打震ふ計り、生れて始めて云ふに云はれぬ心の底より御念佛となへ申し候。そして幾分かを皆様に申上げこんなあきれたものかと御知り下されたかとおもへば、今までありもこうもせねばならぬとの苦勞も心配も何とやらなくなりし心地致し、むづかしき世渡りも俄かに御信用申される確かな方へ御まかせ申した如くに氣安くなり、今迄のやうにこじつけた満足をする必要もなく、物皆すらすら／＼と行くものを、自分よりわざと、小六ヶ敷致居りしにてあらずや、と過ぎし越方を考へ候へば、おかしき／＼へ相成るとも有之候。されば御法誌の一字一句もいひ知られぬ味ひのあるものを、どうして、これがわからざりしかと一事が萬事非常なる趣味を覺え生き甲斐ありとおもはれ候。これ皆大悲の御はからひと感謝の外無之候。とても此心は筆に盡しがたく、なか／＼人様に示しまゐらすこととの及びがたふ候らへば、惡からず御察し下されたく候。

世の中はちりもとゞめぬかゞみぞと
おもひ知らるゝきのふけふかな
おかしたる罪のいよいよしるさかな
世にもくまなき法のひかりに
南無阿彌陀佛……………

二
わだつみの潮のよるひるしげければ
千引の岩もとけすあらめや
謹啓 昨夜は深刻迄御邪魔を任り、誠に申譯御座なく候。

雑 錄

徹底せざる信仰

近角 常 觀

他力の信仰を喜ぶと稱する人で、往々徹底して居らない方があつてあるやうである。即ち往生は一定、御助は治定と云ふ味に達しないので、例へば悪るいけれどもお助けに預かる、罪惡が恩寵であるとか云ふて居るけれども、其下から助かるけれども悪るい心が止まぬと云つて居る、私は之れを五分五分の安心、出達がひの信仰と云つて居る。なぜかと云ふと悪るいけれども助かる、助かるけれども悪るい心が起つて困ると云つて圓周を回る如く循環的に追つ蒐けて歩いて、底止する所がないからである。又悪るい心に於けると同様、善い心が起きたり、善い事が出来るのが恩寵であると云つて居るのも同じ道理であつて、眞の信仰ではない。求道者の陥り易いのは此處である。そして其の病弊はどこにあるかと云ふと、自己の缺陷に堅く蓋をして居つて、缺陷を打ち出さないで、如來の恩寵と云ふことで蓋をしやうとするからである。自己の缺陷を其の儘にして、御慈悲と云ふことで上はべを飾つて置かうとするから、何時迄経つても根切がせぬ、充實しない徹底しないのである。助かつたと思ふ下から悪るい心が起る、善い事をしたと思ふ下から善くない心が起る、それが如來の恩寵

だど心得て居る。斯かる人は嘆異鈔の第九節に示さるゝ、踴躍歡喜の心ちろそかなりと云ふ文を誤解して居るのであつて徹底しないのが當前である、若存若亡するのが當然であると云ふ風に考へて居る、此處は大に注意致さねばならぬ。そんな事であるなら往生は一定御助けは治定とか、即得往生とか云ふことが無意義になつて仕舞ふ。そして之は若い方ばかりでなく之迄の説教を聞いて居る老人の間にも、頗る多い様である。斯う云ふ人は幾ら安心を聞いても、決定の心が起らぬ。所謂出違ひの安心であつて、井戸の釣瓶の如く一方が上がり一方が下がり、向ふの部屋からこちらの部屋へ往つたり來たりして居るやうなものである。教權は尊いもので決して排してならぬものであるけれども、教權を先きに立て、御慈悲を喜ばうとすると、斯う云ふ誤りに陥る。眞の他力の信仰と云ふものは決して斯う云ふものではない。罪業深重煩惱具足と信ぜられ、所が、即ち廣大無邊の御本願と信ぜられるのであつて、之れを喩ふれば茶臺と茶碗のやうなものであらうか。茶碗が若し無かつたならば、茶臺ではない一片の木切れに過ぎぬ、茶碗を戴せ茶碗と一致する所で茶臺があるのである。廣大無邊の御慈悲、超世希有の御本願は、罪業深重の惡人凡夫の爲めに意義が在るのである。吾々は御慈悲を我身の上に附加へるのではない、煩惱具足の凡夫、眞に惡ろき徒ら者と思ふ所が、やるせの無い大悲の本願の思召に夜が明けける所であつて、本願や御慈悲を遠く所へ置いて居つてはならぬ。親を泣かせて流浪して居つたことに氣附いて、親の誠に一致したならば、まだ懷中に金が残つて居るから此の金が無くなつ

時 報

夏季求道會の概況及び
「教行信證」御眞本拜見

數年來夏季傳道の爲求道學舎を初め第二第三求道會の講話何れも休會となりて中央部に於ける夏季は頗寂寞を感ずるを以て、何等かの企を以て之が缺乏を補はんとする希望ありしが、今年始めて夏季求道會を開會して一は此宿望を満足せしめ、一は地方特志の御同朋と相會して共に大悲を喜ぶ好機會を得たり。而して遠く其因縁を尋ねれば從來大日本佛教青年會夏期講習會の爲に夏季傳道中一度近角歸京するを例としたり。而して本年亦六月末越中の傳道に出で七月上旬一旦歸京したるを以て其機會に於て多年の宿望を實現し得たるなり。而して講本も大膽にも多年拜讀し奉りし「教行信證」信卷の一部を以て之に充て、平素謙仰の慶嘆を披瀝し、不思議にも破格を以て會員一同阪東報恩寺所藏「教行信證」聖人眞筆の寶典を拜閱するの殊恩を辱うし、猶偶然にも近角は九月一日より二週間大谷春秋會の爲に御本書達意を講ずることを依頼されたり、返へすも不思議の因縁と云ふべき也。而して此夏季求道會が助縁となりて多年の宿題となりし、求道會館設立の議は深厚なる同情を以て熱心に唱道せられ、遂に世話人の方々の盡力によりて實際經營に着手せらるゝの好運に膺れり

てから親に従はう、と云ふ様な心が起る筈がない。親の誠が知られたならば、不孝な子供でも可愛がつて呉るのであると云つて、流浪して居る譯には行かぬ。本願は佛の全人格である、罪業深重の我れを憐み玉ふと自覺せられた所に本願たり得るのである。だから我が罪惡が直ちに恩寵であるとか、現實生活其儘が直ぐ自然だと云ふのは、眞に御慈悲が喜ばれて居らないからである。罪惡と本願とは何處までも二元的であつて、罪惡がすぐ恩寵だとか云ふ様なことは云へぬ。他力眞宗に於て一念と云ふことを立て、三不信の線のあるのは、此の水際を示されたものであつて、有難い所である。要するに我々が同情を求めて同情を得ない心、是を爲さうと思つて出來ない心、無理と知りつゝ長命を希ふ心、詰まらない人生と思ひ乍ら執着する心は皆な罪惡であると氣がつき、罪業深重の凡夫と思ふ心と如來の御慈悲とが、水も洩らない様にさちんと出會ふ所が眞の安心透徹したる信仰であつて、如來の御慈悲と出違ひになつて、惡ひけれども助かる、助かるけれども惡い心が止まぬとか、善い心が起ると之が如來の恩寵だ杯と、御慈悲と自分とを隔て、計いて、追ひ廻して居るのは信仰のやうに見えても、其の實は信仰でも安心でもなく、徹底せざる信仰と云はねばならぬ。



一として佛天の冥祐たらざるはなし。偏に各地御同朋の同心戮力を仰かずんばならず。唯慚愧に堪へざるは例年に比して中央部が此の如く多忙たりしが爲に、雜誌の發刊一層の延滞を來たし、傳道匆忙の中に執筆したりし原稿も之を出版するの暇を見出し得ざりし爲め、夏季求道會と夏季傳道とに洩れたる地方の御同朋に對しては、却て一層の御無沙汰となりしは洵に陳謝するに詞なし、切に大方の宥恕を請ふ所以也。唯聊か各地御同朋近時の消息を聞くに、多年求道熱心の人々、幾多煩悶苦闘の後、何れも慈光の照耀に遇ふて其攝取の悲懷に安んずるを得て、恰も一段落を告げたるが如き状態にありて。相顧みて過去の經路を語る感あるが如し。各地に於て御同朋に會して親しく相語るに比々皆然らざるはなし。殊に十年未だ相違はざりし同朋の御同朋に會して宿昔の經歴を聞く、皆符節を合せたるが如し。然れども時として多年求道して未だ猶之を得ざるの人尠からず、相違ふて忽ち入信する人頗る多し。而して近時大に注意すべきは世上從來精神上の問題に心掛くるの人、未徹底の信仰若くは思想に滯滞して未だ之を覺らず若くは漸く自覺して、眞信仰に轉入し若くは警策を要するもの頗る多し、是實に權實眞假の區別自ら顯現し來る時機と謂つべし。此點に於ては各自心を潜めて反省して中心何等かの不安の念なきやを願るべし、眞心徹到の人は心中透達して疑慮の介するものなく、我身は罪惡の一塊として落下し去りて唯大悲の願力の強きに懸るの一ある耳。和讃に曰く、五濁惡世の我等こそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれ、夏季求道會も夏季傳道も、要す

るに此強縁を仰ぐの一あるのみ。南無阿彌陀佛。

一條の綱より外は頼みなし

千尋の崖に落つる我身は

遅々ながらも夏季求道會及び傳道中の所感を書して、共に無碍の一道を仰がんかな。

夏季求道會

第一日(九日)開會

午前八時 講話

午後七時 夜會

此朝越中より歸る、米原より九州の有田廣君同車、歸舍すれば恰も會津の和泉鐵次郎君、林龍三郎君來賓相迎えて共に勤行、彌陀成佛の和讃を誦して開會の御禮を爲し、四人食卓を同ふして朝餐を了り、正に八時清涼を趁ふて聴衆滿堂、開會の挨拶と共に報恩講式文を拜誦す、講話第一席は信卷別序第二席は人生問題。前者は大慈の願心を仰ぎ後者は信仰の徹底と未徹底を説く、婦人にして眞摯求道の人頗る多し。所願空しからずして加威力は此等の人々に下れり、南無阿彌陀佛。

會後世話人の方々を頼みて一週間の行事打合せをなして一同心光照護の中に散會、夜會は晚涼を趁ふて集り來る、江頭六郎君入信の告白を爲す、事は昨年夏九州羽犬塚佛教俱樂部に於て二日間の講話をさける時にあり、是より先き同君煩悶することあり、一夜胸中憂然として聲あり、忽にして悟りて曰く我に親あり、自然の現象は其與ふる所なり、彼の與ふる所は我の爲し得る所なり、彼の禁せんとする所は我取る能はざる所也、我は我爲さんと欲する所は皆可也、何んとなれば親の與ふる所なれば也と自ら以爲らく、我眞理を得たりと、時に予

與へんためと稱へ易き念佛こそ成就したるなれと、嗚呼我

にと思ふ端の一瞬過去半生の過程歷々として現前し、懺悔と感謝交々する、林君自ら告白して歡喜踴躍自ら抑ゆる能はず、衆君が態度に同化せられて歡喜極りなし。

第三日(十一日)

午前八時 講話 午前十時 奉迎 午後六時 晚饗會(會

場上野精養軒)講話は信卷一席に止めて、本日は陛下大學に行幸したまふ、大學門前に奉迎し奉る、龍顏殊に麗し。天恩亦南無阿彌陀佛、朝家の御爲め、國民の爲め念佛候べし、世の中安穩なれ、佛法ひろまれと思召べしとの聖訓いと難有し午後六時主として遠來の御同朋歓迎の爲め上野精養軒に於て晚餐會を催す、主客二十二人縁際深き處佛恩を語り、卓を同ふして宿縁を慶ぶ、自然の徳風徐に起り微動す、其風調和にして寒がらず、暑がらず、温涼柔順にして遅からず、疾からず、といふもの眞に當夜の光景たらずんばあらず、而して談偶々求道會館設立の問題に及び異口同音各自思ふ所恰も符節を合せたるか如く、他の語る所は我言はんと欲する所、我言ふ所は他の心を語るが如し、乃ち一般御同朋と謀りて直に事の實行に着手せんことを決す、心絃の共鳴と云はん、德音の響應と云はん、所謂時機の到來せるもの、眞實自ら熟して枝を辭するが如し、佛天の冥祐ましますにあらずんば何ぞ能く此の如くならん、南無阿彌陀佛、出席人員左の如し

近角常觀、鈴木龍司、有田廣、大崎林吉、瀧澤三郎、和泉鐵二郎、林龍三郎、鈴木久作、長尾收一、小澤一、荻野仲三郎、近角常音、蘆原雅亮、八十島基、龜谷凌雲、丸茂猛

戒めて曰く、是れ自然主義也、横着主義也と、乃ち君自ら策進せんと欲す、予亦戒めて曰く是れ律法主義也、遠慮主義也と君進退處する所を知らず、茫として適歸するを知らず、快として樂まず、朝飯を喫す、側に和讃あり、食して之を繕く、煩惱具足と信知して、本願力に乗すれば、すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむと、嗚呼是ある哉、煩惱を以て其儘慈悲と思ふも不可、煩惱を清めて喜ばんと欲するも不可、煩惱具足と信知して本願力に乗するにてありけり、嗚呼佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られていよ、たのもしくおぼゆるなり、一同感を深ふして散會。

第二日(十日)

午前八時 講話

午後七時 夜會

信卷は進みて大聖於哀の善巧を述ぶること深く、人生問題は進みて親心の遺る瀨なき切派つまりたる思召を述ぶ、大草師入信の當時を述ぶ、石山母堂、松本夫人、柏原夫人皆此日の講話にて入信したまふ、唯事ならじ、不可思議といふの外なし此日黄昏かねて御縁ありし越後饒村氏母堂卒然逝去せらる、乃ち順天堂病院に就きて棺前法話を爲し、歸來夜會を開き無常につきて話す、林龍三郎君入信の告白を爲す、君昨年秋已來煩悶に堪えず殊に本年六月予か會津に赴けるの時二日夜信仰を求めて得ず、遂に失望して曰く、信や遂に得べからず來年の事期し難し、或は再び先生に見ゆるの期知り難し、暗然涙を呑みて、歎ずらく、止むを得ずんば爾今念佛でも稱へん哉、予聲に應じて曰く、念佛でもとは如何、此の如き君に

丸茂むね、小林しづ、岡部たみ、原卓一、柏原文太郎、森脇忠市

第四日(十二日)

午前八時 講話 午前十時 追悼會 午後七時 夜會

講話は信卷論註の引文、如彼如來光明智相、如彼名義、欲如實修行相應故の文に至る、畢竟盡十方無碍光如來は罪惡深重の私の爲に五幼思惟永劫修行したまひて現はれたまひし慈悲の御姿といふより外に別の仔細はなし、要するに如來は是れ實相身なり爲物身なりと知ると否とは即ち如實修行相應と不如實修行相應との別れ目なり、極惡深重の我等が爲に成就したまひし本願也、名號也、親心なり、函蓋相應するが如く、我等罪業の子なくんばいかて大悲の親現はれたまはんや、大悲の親現はれたまふにあらずんば我等罪惡生死の徒いかてか出離の縁に遇ふことあらん、午前十時追悼會を催す、是れ恰も昨年辻生絲衣夫人の一週忌に當るを以て其姉妹として柏原文太郎夫人及び一族其施主として追悼會を營まんとの志あり、乃ち之を回縁として求道學舎創立已來清澤先生島田蕃根翁を初めとして過去十年間學舎關係の恩人及び黒田、小林、福岡、中村、長谷部、西川、菅瀬、山川等の入信者、池者、山田等の在舎生、其他有縁御同朋の法名を作り、淨華清香嚴肅なる追悼會を催す、小經及び論偈三首引の勤行を爲し、燒香、禮拜の後、辻夫人及び中村少尉候補生の告白を朗讀して、在生の昔を偲び、且つ永久の信念を味ふ、音容髣髴として其上に在すか如し、其左右に在すか如し和歌の浦の片雄波のよせかけかへらんに同じきもの歎、覺えず泣然として涙下る、夜會

有田廣君の告白あり同君の如き因縁の深厚なる實に稀なり。余年々九州に行きて必ず同君の招を受け、昨年の如き朝鮮の歸途同道して江州報恩講に詣りし學舎に來らる、曰く一年一度求道會舎に來聴せんと、是今年夏期求道會を起したる動機となれり多生曠劫の因縁洵に不思議と謂ふべし。

第五日(十三日)

午前八時 講話

午後七時 夜會

信卷如意の釋、非凡數攝の解至釋の文照等、意味の深長を讚嘆す、此夜下井香潤君の告白あり、同君は久しく人聲社を起して多年人生研究に全力を傾注せしの人、遂に慈光に接觸するに至る、本誌告白欄に詳かなり、現代思潮の人遂に信仰の光に接せずば眞人生を實現すること能はず、同君の如きは實に此經路を指導するものと謂つべし、君眞宗大學に在るの日、特に求道の會を起し、繼續すること三年、之を求めて得ず眼光を人生研究に轉ずるに至りし也、今や宿志初めて報るなりと云ふべし、宿縁の純熟洵に不思議の至也

第六日(十五日)

午前八時 講話

午前十時 信仰談話會

本日は晝間に催されたる唯一の信仰談話會なり、中野てる子、松本夫人、柏原夫人の告白あり、中野氏は恰も昨年夏一日突如として來り、尼たらんことを求めらる、時に近角不在なり、妻説くに頭を剃らずとも心を剃るを干要とすることを以てす、聽かず、厠に入りて髪を断ちて來る大に驚きて母公兄君深く之を誠む、夏季傳道後近角深く其由を問ふ、曰く、福岡筑紫女學校に在るの日、肺を病めるの友人あり常に曰

第七日(十五日)

午前八時 講話

午後七時 夜會

信卷講話も漸次其歩を進め、二河白道の譬喩に至りて聖人の

御自督を仰ぎ、之を愚禿鈔と相照して深く如來招喚の勅命に歸し奉る、遂に般舟讚の敬白一切往生知識等、大須懺悔、釋迦如來實是慈悲父母、種々方便發起我等無上信心の文に至り信卷講話を終了し茲に深く大聖哀の善巧方便を感謝し奉る最後の夜會たるを以て益々熱心に求道せらる、此一週間毎朝七時を以て晨朝の勤行を爲し、晩は九時を以て勤行を爲す、而して熱心なる人々は隨意に勤行に参加して歎異鈔及び御一代開書を輪讀し、感謝禮拜を爲す、一週間に於ける靈感法悦紙筆に盡し難し

十六日(閉會)午前八時一同淺草本願寺に參集し、先づ本堂尊前に跪きて、謹みて拜禮し奉りて茲に滿講の感謝を捧ぐ、會員一々拜禮焼香し奉る、感涙滂沱として仰ぎ拜する能はざる人多し、終りて奥書院に於て親鸞聖人御眞本『教行信證』を拜觀せしめらる、是聖人が性信房に附屬せられたるものにして阪東報恩寺の所藏なり、今常に淺草本願寺寶庫に納められて寶輪は法主臺下の御手許に在り、一年一度の虫乾の外は、決して拜觀を許さるゝことなし、然るに幸に法主臺下特別の恩許を以て拜觀の電命を賜はり、態々大草慧實師及坂東性開師立會の上、恭しく特に寶庫を開きて拜觀を許さる、先日已來繰返したる信卷總序の御文、筆力猷勁にして聖人の御精神紙上に躍如たり、拜見し奉るもの歎歎泣涕せざるなし、式文に所謂廟堂に跪て涙を拭ひ、遺骨を拜して腸を断つといふ所以のもの實に茲に在り、蓋し世上聖人の直筆と稱するもの尠ならずと雖、此御眞本の如く墨痕淋漓として筆に香あり、字々活躍して天真爛熳たるが如きを觀たることなし、聖人が選擇

集を渴仰して宣ふ所、移して以て吾人が御本書に對するの心也、曰く眞宗の簡要、念佛の要義斯に攝在せり、見者諳り易し、誠にはれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典也、年を涉り日を涉りて其教誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ、疎と云ひ此易寫を獲るの徒、甚だ以て難し、爾るに既に製作を書寫し、眞影を圖書せり、是れ專念正業の徳也、是決定往生之徴也、仍て悲喜の涙を抑えて由來の縁を註すといふもの、實に我等が此御本書御眞本を拜見し奉る精神其儘なり、特に今回拜觀を恩許せられたるが如きは、實に是れ空前破格の殊遇なるもの、畢竟是れ蓮華藏界の中にして今の講肆を照見し、檀林寶座の上より斯梵蓮に影向したまふにあらざらんや、拜見の後、再び密封をなして之を秘藏せらるゝを見るに至りては悲泣雨涙一たび聖人に遇ひたてまつりて、再び聖人に別れたてまつるの感なくんばあらず、次に本堂前に集會して紀念の爲に一同撮影を爲す、眞に四十四年夏期求道會の紀念なり次に大廣間に於て茶話會を催す、長尾收一氏先づ起ちて閉會の挨拶を爲し、從來既に發表せられて未だ實際經營せられざるし、求道會館を設立せんことを謀り、世話人を作りて事を進捗せんことを議す、衆皆賛成快諾一日も早く實現を希望せざるなし、大草師亦起ちて挨拶を述べ、切に贊助して一臂の力を揮はんことを矢ひ、且つ性信房が箱根熊野平に於て聖人に分れたてまつりし當時を回想して、以て聖人を追慕したてまつるの情を述べ、傳へ言ふ、時に聖人性信房に示して曰く、病みし子を殘して歸る旅の空、心は跡にのこりこそすれと、時に紀念として古き求道と歎異鈔とを頒つ原卓一氏席上之を

輪讀せんことを發言せらる、乃ち各自輪次之を拜讀し奉る、益々德音を拜聽し奉るの感なくんばあらず、本日本派御命日なるを以て精進の晝食を喫じ、直に坂東報恩寺に詣りて聖人の眞影を拜し奉る、恰も性信房祥月命日に相當せしも亦不可思議の因縁也、聖人御眞影の前に跪きて香を燒き、各自一週間の法縁を喜びて茲に互に袂を分つて相分れんとす、實に聖人箱根に於て性信房と分れたまひし昔を憶はずんばあらず、一撃文類正信偈の勤行始まる、乃ち之を期して各自拜禮解散す、實に此夏季求道會は豫期せずして、一一不思議にも好都合たらざるはなし、顧みれば時正に盂蘭盆會にして、恰も佛自念の日、正に是れ夏安居終結の日たらざらんばあらず、遠くは佛在世の夏安居を偲び、近くは聖人關東御教化の昔を憶ふ、嗚呼本年は聖人六百五十回の大遠忌にして幸に此の如き神聖極りなき會合を催すを得たり、希くば之を事例として、年々夏季求道會を開きて平素相見えざる御同朋と相會して以て聖人の御精神たる御本書を拜し奉らんかな、嗚呼來年の夏季求道會、今より期して以て待ち奉るべき也、最後に此會合に列せられし人名を録して以て紀念とす。曰く

- 近角常觀、有田廣、和泉鐵次郎、林龍三郎、柏原祐義、瀧澤三郎、福住春次、葦原雅亮、佐々木博、大作孝太郎、杉崎大愚、笠木輔一、角谷八三郎、大崎林吉、宇佐美英太郎、大澤喜太郎、鈴木龍司、北垣成文、上原謙二、小栗栖國道、石倉榮十郎、藤島信太郎、伊藤仁吉、戸澤通明、菊田宣暢、石井周壽、高坂龜太郎、同々々、同々々、梶山淺次郎、霜鳥セツ、佐藤兵太郎、今岡信一郎、葛原豐作、中原菊英、

- 丸茂むね、同ふみ、新名たみ、小出はや、三田、小林しづ、山名花野、長尾か壽、柏原あき子、島田幸子、横矢雪、小澤一、岡部民子、加藤照、生沼きく、松本彦次郎、佐々木きくの、長島して、長澤惠海、齋藤教慧、近角常音、牧田平太郎、峯田龜太郎、内藤智秀、確井半二、龜谷凌雲、高原覺應、鈴木久作、佐藤直丸、朝倉長司、湊トミ、湊八重子、江頭六郎、松本千代、尾瀬田つる、林義善、野田濱子、山名龍宣、近藤秀映、澤田實、大佛衛、井口實太、牛腸鐵乘、淺野儀人、坂倉はま、磨墨香月、原卓一、小林原八、佐伯正、姉崎そて子、石山須磨子、熊谷正藏、木場了本、宇野いね、菅原廣濟、古川平六、小林助八、近角きそ子、渡邊ゆか、松本たみ、神戸彌作、小南英策、森脇忠市、峰田龜太郎、内藤智秀、田中美那、加藤てふ、安倉翠、小熊まさ、永田衛吉、佐藤直丸、佐々木つか、前田つな、畑いゑ、武田慧宏、清水かつ、中野てる、守口やすえ、和田幽玄、笠木省一郎、矢部民野、小林昇、下井香潤、宇野ハツ、不破とき、梅岡さん、同原太郎、向坊久五郎、富岡教雲、信樂隨縁、

求道會館建設の相談會及其發表

求道會館建設の議一たび起りてより、直に夏季求道會中第一回相談會は開かれたり、西澤善七、小河滋次郎、荻野仲三郎、柏原文太郎、武田慧宏、原卓一、和泉鐵次郎、林龍三郎

有田廣、長尾收一、大崎林吉、瀧澤三郎、小澤一、森脇忠市、鈴木龍司等の諸氏なり、先づ第一着に世話人を決定し、今回の勸募及經營は世話人之が主導となり、嘗て發企者に於て發表したる趣意書に従ひ着々之を實行すること、爲し、常務員を設けて常に學舎に集會し、審議熟談大に事務の進捗を來たせり、夏季求道會閉會の翌十七日より以後毎日若くは隔日常務員は張簿を整理し人名を調べ、趣意書及び世話人の依頼狀發企者の書面等を發送し、其盡力筆紙の能く盡す所に非ず、長尾收一、大崎林吉、武田慧宏、原卓一、小澤一、森脇忠市の諸氏中夏三伏の炎熱中にありて其全力を捧げて事務執掌日以て夜に繼ぐ狀況にてありき、感謝言ふ所を知らず、趣意書及び依頼狀左の如し、

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ、一般に道義の制裁弛み去りて人皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして、志操清淨なる人は、其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志如此切實なるは未だ嘗て見ざる所也。昨年已來、聊か此時運の必要に應ぜんとする微志より先輩の企てられし跡を引き繼ぎ、一方には求道學舎を設け、此等の道を求むる人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、又一方には日曜講話を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀の眞祐と師友の同情とによりて其期する所空しからず、學舎は常に満員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は常に狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道

友の勸告に従ひ、學舎を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤厚なる先輩の指導に従ひ、忠實なる親友の贊助を仰ぎ、着實なる實行によりて漸次其の結果を挙げむこと、是實に不肖の至願也。從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ずると一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて未容易に成效の曉に達せざる所以のものは、蓋其規模大にして完全を期すればなり。故に先現時の必需に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且清潔なる社交の中心に供せんと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初めとして、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて此等の事業の我國佛敎者の手にならむとを望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得ば幸之に過ぐるなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむとを謹て白す。明治三十六年十月

發企者 近角常觀

時勢の要求する所、曩日別紙求道會館設立趣意書の發表となりしが、爾來數年を経て未だ會館設立の運びに至らず、これ畢竟近角師が專心一意布敎傳道に急にして、實際經營の餘暇を有せられざるが爲なり。然るに明年は學舎創設已後滿十年たらんとし、信仰の氣運正に純熟して、求道者益々多きを加へ、從來の設備を以ては此の要求を満足せしむるあたはず、且つ現在の家屋漸次朽敗して會館建築

の必要は更に焦眉の急を告ぐるに至れり。我等同志或は師の勸化に随喜し、或は師の熱心に同情する者、茲に胥謀つて専ら勸募の事に従ひ、以て師の素志を貫徹せしめんとす。伏して願はくば四方有縁の士助施捐財以て此の必需有用の事業をして速に完成せしめられんことを、謹て白す。

明治四十四年七月

世話人 (イロハ順)
西澤善七郎
小河滋次郎
大野慧三郎
萩原文三郎
柏野仲太
長尾田収
有柳政太郎
澤柳政太郎

求道會館設計豫算概要

一金參萬五千圓
會館建築費備付品費
並ニ之ニ關スル諸雜費
內金參千貳百七拾八圓〇九錢
從前ノ寄附金受領總額
瓦葺煉瓦造坪數八十八坪

御注意
一寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面に

通文信記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七郎の宛名必らず御記入願上候。館設立領收の節は近角常觀師より感謝狀を差出し、且つ求道誌上に報告可仕候。

豫而御同情を賜はり候。求道會館建設の儀に付、今回深厚なる御親切を以て、御世話被成下候時機に立至り候事、全く佛天之御冥祐と、只管感謝之外無之候。特に今年は、聖人六百五十年之聖忌に遇ひ奉り、來年は恰も求道學舎創立滿十周年に御當り候につきては、何卒此好機に於て多年之念願成就任候様、御援助被成下度、偏に御願申上候。猶此因縁を以て、益々法縁を重ね教契を深めて、永劫の交を賜はり度、念し奉り候。右御願申上度、如此御座候。頓首。

明治四十四年月 日

近角常觀

右趣意書及び書狀の發送を終りたるは八月三十一日なりき而して九月四日より日々四方御同朋より着々御寄附を辱し實に感謝言ふ所を知らず實に形影相隨ひ音響相應ずと謂はんか嗚呼是れ多年御同明が同心一體同一念佛の御賜たらざるはなを發して以て深く海嶽の洪恩を感謝し奉る次號に於て詳細に之を發表して以て滿腔の誠意を披瀝せんと欲す南無阿彌陀佛謹誌發行並に事務全般會館事務と差合候爲萬事延滞致候段何卒不惡御宿怨被下度候。求道會館發行所謹て御禮申上候。

近角常觀師序 鈴木龍司著

入信之經路

九月一日發行
正價 三拾錢
郵稅 四錢

著者は宗教家にあらず、僧侶にあらず、たゞ現代に生活し、現代の空氣に觸れ、而も、所謂近代人たるに甘んずることを得ざる一青年也。

然り而して、筆をその幼時の記憶より起し、中學にありては、儒教的理想と奮闘し、無我愛を信じては、進むべきの行路を得、第一高等學校の三年を経過して、文科大學に學びては、所謂灰色の人生觀に満足すること能はずして、張合のなき日暮しをかこち、遂に一事件に遭遇するや、今迄の修養的立場、主觀的立脚地にては、いかにするとも安住の地を見出すこと能はず、一切の思想を捨て、直ちに走りて、絶對他方の恩寵に浴し、佛陀切々の慈愛に泣くの状態、廿四年の心的經過と相待つて、一の飾りなく、有の儘に告白するもの即ち本書也。衷心止むに止まれぬ欲求を持して、暗黒の裡に彷徨する眞面目なる近代青年の苦悶の跡、萬人の肺腑を衝いて、人をして思はず佛陀の大懷に宿らざるを得ざらしむ。世の理想なきに苦しむもの、人生問題の歸趣を得ざるに悩むの士に、是非一讀をすむ。

發行所 近角常觀
發行所 江森求道
發行所 森求道
發行所 江森求道

訂正 增補 信仰之餘瀝

第拾壹版 定價 卅錢 郵稅 四錢 袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の異暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時。自ら其心的経過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、絶たすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十一版を出すに及び本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所なり。而して先に第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處も篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰経過を告白して、附録として「予が信仰的實験」なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

親鸞聖人の信仰

第貳版 定價 七拾錢 小包料 八錢

親鸞聖人の「教行信證」は、聖人が一代の信仰経験を結晶して、他力信仰の本源を闡明し給ひたる真宗根本の寶典也。而して本書は著者が入信以來起居常に此の寶典を以て自己が信仰の指針となし、日々夕夕繙讀之餘、茲に初めて其の實験信味の餘瀝を編述したるものとなす。幸に有縁同朋の士、一讀を賜はん事を。

近角常觀 著

人生と信仰

第參版 定價 卅錢 郵稅 四錢 袖珍美本

●第一章 人生問題と信仰
●第二章 悲觀思想と信仰
●第三章 倫理力行と信仰
●第四章 犯罪心理と信仰
●第五章 社會問題と信仰
●第六章 國家秩序と信仰
●第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年「求道」秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せん眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

發行所 東京市本郷區森川町一丁目一六九六番 求道發行所

信仰之餘瀝要略

第二版

施本用小冊子

定價五錢 郵稅二錢 部數に應じ充分割引す(但し四冊迄は) 本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」境界に於ける監獄以下二章を抜萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

冠唯唯信鈔文意鈔

新版

定價七錢 郵稅三冊迄貳錢(部數に應じ充分割引す) 「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重なるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

東京市本郷區森川町一丁目一六九六番 求道發行所

規定

- 一 本誌は毎月一回十五日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の住所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	一六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十四年九月十二日印刷
明治四十四年九月十五日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
發行所 東京市本郷區森川町一番地
求道發行所 (振替口座東京一六九六番)

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

前號要目

求道

◎他方信仰の妙趣

自督

◎煩惱の所爲

講話

◎如來の加威力

告白

◎御待兼ねとは自分の事であつた

小林しづ

◎如來様の御直言

山名花

雜錄

◎人生の意義は信仰にあり

近角常觀

◎信の力

同

◎まことの愛、まことの節操

同

信界

◎決定、解決

時報

◎夏期傳道日割